

や
ま
と



事務局用

金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会

H 6. 12. 24 筑速

会報2号 (94冬号)

OB会会長の挨拶

13期 大島 良治

OBの方々にはお元気にお過ごしのことと思います。近頃の金沢の天候は暑い夏が終わり（本当に暑い夏でした）、涼しいというより、肌寒く感じます。北陸の冬が、もうすぐ到来しそうだという事が、何となく判る天候でもあります。

先日、後輩達（現役の3回生）8名と会食し、楽しい時間を過ごしました。

以下、その話題を紹介しますと

1) 山小屋の改修は、屋根、床張りが終了し、壁板張りを残すのみだそうです。OB会より小屋作業に、特別援助金5万円を差し入れましたが、彼等はこれを4パーティーに分け、ある隊は松茸、ある隊はメロンを購入して英気を養い、作業能率は抜群に向上したとのことでした。

2) 現役3回生8名の役割は、主将、副将、パーワン議長、---（残りの名称は忘れましたが）、全ての3回生が役割分担をしているそうです。昔はそんなに沢山なかった様に記憶しています。OB連絡係もありましたので、安心しました。

3) 最近では冬合宿もしているそうです。（編者

注；初めはスキー合宿だけでしたが、昭和44年冬より冬山合宿が始まり、以後ずっと継続されております。）本年は荒島岳？に決定しているとか。昔のように（20年以上前）、何か最終目標の山があるのか、聞くのを忘れましたが、きっとあるのでしょう。

4) 新しい部室は、ワンゲルだけで一部屋使用していた以前とは違い、大部屋で、囲いも何もない空間だそうです。何を当局は考えているのでしょうか。本当に理解に苦しみます。この大部屋部室に、私が時計を近々持って行ってあげようと約束しましたが、仕事で角間キャンパスへ日参しておりますにもかかわらず、今日現在実行されてはおりません。本年中には何とか...

5) 今ワンゲルが「一番欲しい、必要としているものは？」という話題では、昔はテントが一番、ホエーブス（今でもあるのか？）が二番、と相場は決まっていたように思います。現役諸君の話を総合的に判断すると、何となく昔と同様でしたが、切実な感はありませんでした。現在は物質文明である事が良く判りました。

6) -----

以上で終わり

尚、当日はOB会の役員会も兼ねており、二

三の決め事もしましたので、事務局の舟田さんより、皆様に御連絡されると思います。

その中で、会費払込対象OBは450名強ですが、払込済の方は現在、三分の一強です。忙しい生活を送っているOBも大勢おいでになる筈なので、落ち着いた頃にはきっと会費を払込んでいただけるものと信じております。次のOB総会までは、この様な考えで、全OBの方々へ

の連絡を継続していくという事で、ご承認下さるようお願い致します。

最後に、北陸の冬は天候にはあまり恵まれませんが、食べ物には大変恵まれています。金沢に何年も御無沙汰しておいでの方がおありでしたら、北陸の味を思い出す旅行を計画し、その折新しい部室も訪問したらいかがでしょうか。では皆様、お元気で過ごして下さい。

予告

来秋 BHにて「月見の宴」を開催！

昨秋に続き今年もBHの改修が行われ、数年ぶりに小屋は宿泊可能となりました。
多大な御協力をありがとうございました。



さてこの機会に、「改修披露」を趣旨として、「月見の宴」を催すことに致しました。昨夏の35周年記念山行が悪天により中止となり、山恋のエネルギーを持て余されている方々も多いことと存じます。倉谷は、KUWVの歴史の刻まれた地。犀川ダムから1時間強といっても、なかなか訪ねられないのは、ワングルの仲間もいてこそ懐かしい土地の思いが強いためではないでしょうか？

主催はOB会。各種連絡や会計事務を担当し、現役には現場進行を依頼します。日時は来年度新執行部が誕生してからご連絡しますが、現在小屋作業にあてられている9月下旬あたりが有力です。

つきましては、同封の一言通信葉書の所定欄にて、参加希望をお知らせ下さい。参加概数を把握して、企画を練っていきます。次回会報('95年夏号)に、正式の案内状と、参加申し込みはがきを同封します。

くこれまでこの種の企画は、初代BH完工後(昭和39年11月)、二代目BH完工後(昭和49年10月)にとりおこなわれました。その他にBHへOB諸氏をご招待したのは、昭和48年11月の部創立15周年記念、昭和52年、昭和54年となっており、15期桂氏の13回忌を行った昭和57年5月が最後になるようです。小屋作業が衰退した近年ではOB御招待といった企画が出てくる余地もなかったようでした。

今回、昨年度の執行部36期生からの努力により小屋が宿泊可能となり、このような企画をOB会側から立案致しました。しかしながら、後の小屋作業の記録をお読みいただければわかりますように、小屋の耐用年数はほぼ尽きております。現役主体で判断してもらえばよいといっても、一年限りで交替していく執行部には「どちらの」結論も出しかね、重過ぎる課題であることをご理解いただきたく思います。

あるいは今回が、BHにOBをご招待できる最後となるかもしれません。秋の夜長、倉谷の流れにありし日々を懐かしみながら、今後についての指針が協議できれば何よりと思います。もちろん、馬鹿騒ぎのみで終わりましたも、小屋活用の趣旨の方は全うできますので、十二分にアルコールを用意されて、お越し下さい。>



OB会役員会の活動経過 とOB関係情報

(井は日時の確定していないもの)

- 7月6日 OB会役員通信NO5 発送
- 7月13日 OB会報発送 (坂尻 舟田 北川
椿川 深田 (厚) 板尾 中川)
- 7月24日 19期達磨知香さんの夫 医王山で
遭難騒ぎ 翌日無事保護される
- 7月28日 21期連絡員 江口 喜美江さん死去
OB会より香典1万円
- 8月17日 現役に新入部員分の記念誌を譲渡
- 9月14日 現役に小屋作業特別援助金5万円を
差し入れ
- 9月16日 OB会役員会通信NO6 発送
- 9月井 原稿依頼発送
- 9月27日 OB会役員会通信NO7 発送
- 10月5日 OB会役員会 ならびに現役3回生
との懇親会
- 10月10日 OB会名簿の改訂版原稿作成 (名倉)
- 10月19日 各期連絡員に名簿の確認発送
- 10月井 払込状況集計 (鳥越)
一言通信葉書作成 (坂尻)
- 10月18日 現役より原稿入手
- 10月19日 OB会役員会通信NO8 発送
- 11月10日 名簿改訂版仕上げ・発送ラベル作成
(名倉)
印刷 (中川)
製本手配 (北川)
- 11月下旬 会報発送 (椿川 久富)



森の大将 イラスト竹中 敏
自然人27号より

以下、役員会にて決めたことを紹介します。正式には、総会にて承認を受けるべきこともありますが、とりあえず試行錯誤の中で善処を図っているというあたりで報告しておきます。

☆年会費について

おかげ様で順調な払込をいただいています。会計上の区切りは、次回総会までとし、総会までには完納をお願いしたいと存じます。

払込をいただいた方のご芳名は別記してありますので、お忘れの方、他の会費と混同し不明となっている方はご確認下さい。

今後は未納の方と単年度払込者へは、会報夏号にのみ、払込用紙を同封していきます。払込済の方へは、一言通信はがきを封入します。こういった仕分け封入と、その確認作業にはたいへんな時間がかかります。一律の作業で済みますよう、できるだけ速やかに払込を終了されますようご協力下さい。

支出については、総会までは、金額の大きなものについて適宜報告とさせていただきます。年二回の会報の発送と、40周年記念前の何回分かの連絡費を優先確保したうえで、払込状況も見ながら一件一件の支出について協議・決定している状態です。(部誌BHがかなりの金額になる筈でしたが、あれからどうも進行していないようです。尚、OB会報の方は現役にも配布されています。)

また、学生OBの処遇について、「脛かじりの間は免除」の案もありましたが、「現役時代には部費と山岳保険を負担しているのであり、二千元のOB会費が無理な負担額になるとはいえない」という理由により、4回生終了の翌年から、会費払込対象となることを確認しました。

☆慶弔費について

7月末、21期連絡員の江口さんが亡くなられ、OB会より1万円を香典として包み、役員の中川氏に参列してもらいました。創立37年目を迎え、遺憾ながらこんな事態も増えてくるものと

予想されます。遠方のOBの計報の場合はどうするのか？計報OBが会費未納（滞納と解釈してもいいのか？）の場合はどうするのか？OB会の基盤がしっかりしないうちは、慶弔細則までは決めかねるということで、ケース・バイ・ケースで今しばらく対応していくことにします。

追悼山行につきましては、現在まだ協議していません。実の所、この8月にあった蒲原さんの追悼山行では、事前に連絡をとるのを事務局長が忘れてしまいました。ご両親も出席されていたそうで、OB会からの花束といったもので、わずかでもお慰めできたらよかったのにと思いました。多くの方が忘れてしまうことだけに、これは却って明文化して、その山行のCLが請求し易い体制にしておいた方が、よいのではと思います。次回協議してみます。

☆役員追加について

OB会の現役員は、総会前に、実行委員会で協議・本人の承諾をとり、総会ではそのまま御承認いただく形をとりました。

その際考慮されたのは、役員を各年代に散らすより、ある世代に固めて動き易くする。次の総会で、役員全体を次の世代にくり下げるといった体制でした。

それは、10年前のOB会設立運動の際、各年代の意見を吸い上げるため役員を分散任命したのですが、年代差の広がりライフスタイルのずれともなり、無理をして出席しても話が合わない、楽しくない…と、役員会自体が開催不能になってしまったことへの反省からでした。

実際、現在わずかの時間をやりくりしながらも、OB会の機構が維持できているのは、年代を固めて、動き易くなっているおかげです。その点では、選出の姿勢は間違っていなかったと思います。

ところが、やはり欠点があります。会報の編集にかかってみると、役員のいる世代からの情

報は何となく入ってき、紙面に載せることが可能です。どうしても、1桁代OBや、若手OBからの情報が、抜けてしまうのです。

「払込通信欄」で多少のカバーはできるものの、どうせ発行するなら、ワンゲルの情報に関しては、会報を見ればわかるとか、どの代のOBにも楽しみにしてもらえようようにしたいと思えます。

以上の理由から下記の3氏を（+サポート1名）を役員に追加することを決定しました。

5期 稲葉 正己氏（7期 村田 泰恵氏）
29期 高木 美保氏
33期 奥出 俊一氏

- 1) 通信費をOB会で負担
- 2) 役員会通信を発送
- 3) 役員会への出席義務はなし

といった待遇で、特に会報への情報連絡を心がけていただくことにしました。1桁代にはOBが多数のため、7期村田氏にもご協力をいただくことにしました。

以上 各氏にご了承いただきました。

☆会報発行・送付作業について

会報は今後、夏号（7月）と冬号（11月）を発行していきます。

夏号—OB通信紹介 寄稿

新執行部紹介 夏合宿、他の予定紹介

その年度の年会費払込票封入

完納者へは一言通信はがき封入

冬号—OB通信紹介 寄稿

現役紹介 合宿・小屋作業報告

OB名簿改訂

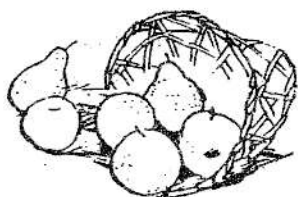
一言通信はがき 一律封入

（名簿改訂の時は、製本を業者に発注）

1年に2回の発行ペースなら、郵便局の転送サービスが利用できる、転居先不明をカバーしていけそうです。一言通信はがきについては、即記

入・投函されて、以後の作業が円滑に進みますよう御協力下さい。

また、発送に関しては、役員のうち、椿川氏・久富氏が担当と決まりました。彼等は地元OBをリストアップし、年2回の発送作業（行事がある時は増える場合もあります。）を公平に振り分け、電話で協力を要請するそうです。2年の間に1度出ていただくくらいで済みそうですので、依頼がありました時にはよろしく願います。



その他、懇親会でのよもやま話から…

□新入生勧誘について…今年は勧誘活動がやりにくかった。立看板を禁止された。山岳部はそれでも作って立てていたが、早速撤去されていた。また、説明会場が指定されていて、その教室へわざわざ出向いてもらわないと説明できない状態になっていた。あれでは元々ワンゲルに入ろうという意志のある者しかキヤッチできない。今年勧誘にあたった2回生は近年では多い方なのだが、それでも9名獲得という結果で終わった。

近年では、同好会といった軽いサークルの方が好まれている。アウトドアといっても低調。中ではサイクリング部が隆盛。やはりカッコいいのでは？

□現在出ているPWでは、車を使うのは半数ぐらい（むしろ弱）。車まで戻らねばならない制限が出てくるので、主流ではない。

□足りないもの…？今もワンゲル精神にのっとり、ゴミ箱などは、構内備品から拝借しているとのこと。「テントは？」と聞くと「

そんな時は部費を臨時徴収して賄っているが…」。ここでP審議長はきっぱりと、「そんな物をもらうと、もっと備品の扱いが悪くなるからダメ。」と断言。「僕達が入った頃に使っていたテントより、その後買った新しいテントの方が破損がひどい。新しい方を使いたがるせいかもしれないが、こんな状態で安易にもらうと、もっと備品の扱いが悪くなるから、いいです」…ワンゲル精神は健在です。備品については、リストを作り、それぞれの耐用年数を考慮して、購入計画をたてること。それで不都合があったり、またOBとの行事のために不足が生じるようであれば、OB会の方でも協議してみるから連絡をくれるよう伝えました。

□山小屋の看板というか、表札の古いのはどうすれば？そのまま懸けておいた方がよいのか？…特に言われがあるとかは聞いていない。その時の作業をした代が、自分達の記念として自作の物を懸けておけばいいのでは。

□山小屋への上がり口に案内板のような物を立てれば、他の人にも利用してもらえるのでは…小屋には管理責任がある。善意の利用者ばかりではなく、特に火の始末が心配。ワンゲル関係の者なら案内板がなくてもわかるのであり、利用したい人はあらかじめ部へ届けるのが原則。したがって案内板は不用。また鍵もつけるべき。（鍵の番号については、事務局でも控え、次の機会には会報に載せることにします。）

3回生達は、行事も冬合宿・春合宿を残すのみとなり、肩の荷を下ろしたような安堵感が漂う一方、いよいよこれからは就職戦線。我が身の振り方を決める時といった緊迫感も漂わせていました。OBの方は自分達が現役であった頃の活動なども紹介し、反省やアドバイスを交えながら、彼等の半年の労をねぎらいました。今力を合わせている友が一生の友になることを、OBからの究極の助言（？）として懇親会を締めくくりました。

払込票通信欄より

楽しい近況報告の数々をいただきました。払込を急がれるあまり、通信欄を書き損ねた方は、今回同封の一言通信葉書を利用して、近況をお知らせ下さい。尚、「OB会費です」のみは削除いたしました。(以下、払込順に掲載)

*誰かが云った。「中年とは少年の日の夢のリターンマッチの季節である」と。私は今、カミさんのヒモとなり、少年の日の夢、天文学(天体物理学)の研究者たらんと努めんとする也。

3期 田村 昭夫

*この世で恨めしいもの一動けない年の夏の晴天。でもキャンプなら楽しめるかもしれませんね。(これは鳥越さんあて)

7月24日は昇滝。現役時代に行けなかった所が次々に落城。もしかしたら、そうやって宿題をいくつか残しておいたのがよかったのかも...

15期 舟田 節子

*無理をしてOBだよりを編集される必要はありません。会費は金沢を中心としたOBの活動に使って下さい。

5期 山田 允

*霊仙、伊吹へは時々登っています。今夏は大学、高校、小学の子供を連れて立山三山へ行く予定です。長女はBACK PACKINGのクラブへ入っているようです。現役の方はいつまでも思い出に残る良い体験を楽しんで下さい。

OB役員の方 御苦労さんです。

9期 吉田 幸造

*例年がない早い梅雨明けで、入道雲が白く輝いています。現役部員の皆様の心は夏合宿に馳せているのではないのでしょうか。安全への配慮をおこたりにく、万全の準備を整えて無事な山行を祈っています。

またOBの事務局の方には大変ごくろう様です。今年の夏もことのほか暑さがしめるのではないのでしょうか。時節柄お身体を大切になさ

て下さい。

13期 橋正 徹

*いつもお世話になっています。今後ともよろしく。

23期 村井 匠

*OB会の御世話頂き感謝しております。不況の中、景気は底を打ったと言いますが厳しい中で頑張っています。休日には小松市或いは石川県の近隣の山に登っています。

3期 西尾 皓史

*部屋の窓から富士山を眺めながら晴天沈殿の日々を送っています。秋になったらあの挟れた宝永火口へ行ってみようかと考えています。ハンドパワーにマイッタ安達より。

22期 安達 敦子

*御世話の方大変でしょうが宜敷くお願いします。

1期 仙田 厚太郎



*御苦労様です。子供達も大きくなり(小3と小2)そろそろ親子で山登りが楽しめるかなと思う今日この頃です。

21期 大沢 安一

*OB会役員の皆様、御苦労さまです。城内の部室がとうとうなくなり寂しい気がします。昨年の夏35周年記念の際に寄ったのが最後になってしまいました。

25期 樋口 隆樹

*OB会幹事御苦労様です。現在泉丘高校で教員を務めております。

28期 浜本 信一

*昨年は父が亡くなったりして何となく淋しく慌ただしい1年で、夏にあったOB会にも出席したいなと思いつつ、あっという間に時間が過ぎていってしまいました。

現在は小学生の子供を3人かかえ、石引にある国立病院向かいの薬局でパートのおばさんをやっています。

19期 塗谷 光枝

*ただただ忙しい毎日です。引っ越しました。

4期 鈴木 正国

*御苦労様です。今後のOB会の活動に期待しています。また機会があれば参加させて欲しいと思います。お金は二人分・5年分ということです。(妻悠子の分も含んでいます)

23期 広岡 謙一・24期 悠子

*暑い日が続きますね。4月から住所が下記のように変更になりました。水族館という夏休みがかせぎどきの職場に勤めるようになったので夏山に登りにいけないのが残念です。しばらくは家で2万5千分の1の地図をながめるだけの日々が続くようです。でもそれがけっこう楽しかったりするのですが。33期 岡田 敏

*ごくろう様です。山から離れている私ですが会報を見ると現役の頃を思い出します。

20期 中村 元風

*同期会等が行われたら、そんなものも会報にのせてみては？

23期 石地 隆司

*暑中御見舞い申し上げます。8/1-8/5 娘が中学校主催の夏山登山に参加することになりました。中房温泉から燕岳・常念岳のコースです。(中・高生50名) 現役の夏合宿にHパーティというのがあって、near miss することがあったらステキなのに…なんて想像しています。照れ屋の娘なので「どこかでKUNVの文字を見られたら、どうぞ声をかけてやって下さい」の御要望にはお応えしかねるとは思いますが。反対に愛知淑徳には声かけしてやって下さいね。

13期 柴田 茂樹・訓子

*金沢の香り、ありがとうございます。私も8/15に機械科の同窓会で金沢へ行きます。昨年はOB会、一昨年は講座の20周年、これで3年続けて金沢の地を訪れることになります。青

春の地はいつ訪れてもいいものですね。

11期 森川 功

*幹事御苦労様です。楽しく読ませていただきました。

15期 松縄 宏

*ごくろうさま。よろしくお願いします。

6期 大崎 進

*昨夏なつかしい仲間と久し振りに顔を会わせてから、はや一年が過ぎました。次の機会には他の仲間も集まってくれるよう自分からも働きかけたいと思っております。

夏には白山か立山、できればなつかしの雲の平あたりへと思っているのですが、どうなることやら…。

8期 穴田 昭一

*「やまざと」を読ませていただきました。四十代も終わりに近づき金大ワンゲル時代は夢の又夢。耳なれない角間キャンパス云々と言われれば 益々わが青春の心の故郷は、遠きにありて思うもの…の感深き'94夏真盛りです。現役諸君(考えてみれば、私の子供と同世代か…)の活躍を祈っております。

9期 谷道 正晴

*33期の住所変更報告が遅れ、ご迷惑をおかけしました。今春の卒業後も、学生のふりして角間の図書館へ通い、公務員試験勉強のかたわら夕刻にはしばしばトレーニングに出発しています。物怖じしない後輩達の中には、まだ25歳の若手OBをつかまえて、「ワンゲルのジーク」などとのたまう者もありますが、そこはそれ、精神的支柱という意味も含まれているのだなと善意に解釈しています。(実態は、気晴らしにサッカーに行っているだけです)

33期 奥出 俊一

*OB会の運営ご苦労様です。大変でしょうが頑張ってください。小生が約10年間関わってきた住宅団地が完成しました。そこには学生時代か



ら好きだった自然林に囲まれた大きな池をもった約7ヘクタールの公園があります。そしてその畔に温泉があるんです。ぜひ一度おいで下さい。

3期 鈴木 兵一

*いつもワンゲルからのおたより送ってくれてありがとうございます。住所が変わったので連絡します。部費納入できません、よろしく。でも連絡下さいね。(事務局…???)

北海道は今短い夏を満喫謳歌しています。牧草の種にまじってきた西洋の花があちこちに咲きみだれ、花びんの花はたえることがありません。冬は凍土の畑に、ラディッシュ、べんり菜などの収穫に忙しいです。

14期 仁藤 早苗



*お世話、ご苦労さまです。

6期 中川 皓三郎

- *1. 昨年の白山行、断念が悔しい。
- 2. ボチボチ足腰を鍛え(?)て、将来に備える。
- 3. 諸君の健闘を祈る。

4期 森島 稔

*役員 of 皆さん、事務局 of 皆さん、お世話になります。よろしく！

15期 金井 澄

*暑中お見舞い申し上げます。便りを受け取ったら、すぐに郵便局へ行かないと忘れてしまいそうです…。

15期 坂尻 忠秀

*鳥越さんお元気ですか。我が25期は今年5月連休の樋口君を最後に皆めでたく結婚しました。

(ちなみに一番手は広田氏・旧姓石黒)

OB会発足で懐かしい情報が遠くにいても知ることが出来ることに感謝しています。期の連絡員として微力ながらお手伝い出来ることをしたいと思います。

25期 高橋 伸治

*9/4-12/17はタイへ出張。95は1月より7カ月間スリランカの予定です。遊びに来る

人があれば、立ち寄って下さい。

25期 石本 一鶴

*仕事の多忙からしばらく山行もままならなかったのですが、健康上のことも考え、月に一度位は鈴鹿の山を歩くよう心がけています。

10期 寺本 典生

*4月に結婚し、住所が下記のように変わりました。新宮市立丹鶴小学校に勤務して2年目になります。年に2-3回軽めの登山を続けています。今年は宮之浦岳に登る予定です。

26期 嶋田 雅昭

*いよいよ夏合宿の季節ですね。気をつけて頑張ってください。当方も現役の時のようにはいきませんが今年は家族で白馬岳に行く予定です。OB会幹事の皆様にはお世話になりっぱなしで恐縮しております。今後共よろしくお願いします。

12期 西田 一秀

*「やまざと」ありがとうございます。子どもが3才になり2人めがまだおなかにいないこの夏、昨年とうってかわっての好天続き、山に行きたくてうずうずしています。(先立つ体力がありませんが…)。いつか子連れで白山へ登るのが夢です。いつもお世話して頂いてすみません。

26期 山口 雪枝

*幹事ご苦労様です。当方の住所一部間違っているので訂正願います。9期 保田 敦

*ご苦労様です。金沢から遠く離れ、小さい子供に追われて、山へも10年近く登っておりません。自動車の窓から山を見つめるのみの日々です。(名古屋では、そう高い山はほとんどありませんか)

21期 加藤 万里子

*1万円は会費、二千元は先日亡くなった21期江口(旧姓村中)さんのお通夜に集まったOBから生花代を徴収し、余った分です。カンパと

して受け取って下さい。20期 久富 象二

*勤務先変更 石川県庁総務部消防防災課

16期 英 俊彦

*日頃のOB会活動ご苦労様です。私達17期も
久し振りに同期会を'94. 2. 19近江・須賀谷
温泉で行いました。来秋また集まる約束をしま
した。また、小島君の世話で東海ワンゲル会も
'94. 6. 11に集まりをもつことができました。

17期 渡辺 和文

*御苦労様です。 12期 宮島 孝司

*「やまざと」ありがとうございました。去る
5月中旬に久し振りに金沢を訪れましたが、新
キャンパスに行く時間がありませんでした。

現役39期と聞くとなんと時間の経ったことか
と思います。事務局、在金沢のOBの方々御苦
労様です。 6期 石橋 毅

*OB会誌読みました。定期的に会誌を出すの
は、大変苦勞のいる又手間のかかる仕事です。
諸幹事の方々には感謝します。今後も継続をお
願ひします。 8期 永谷 洋三

*送金が遅くなり、申し訳ございません。5ヶ
年分を一括して送金します。

役員の皆様には大変御苦労様です。一枚一枚
手書きの振込用紙には感謝致します。

15期 横井 昭次

*OB会事務局の方々、精力的に活動していた
だきまして、会報等受け取る度に心の中で頭を
下げています。

私の勤務先の小学校は鈴鹿時ふもとで、つ
ねにおいしい空気を存分に吸い、しあわせです。
その為か、いたって達者です。

26期 益川 珠美代

* (寄付1万円) 3期 池本 和彦

*送金が遅くなりました。小生も多忙な日々を
送っています。 13期 伊藤 純治

*足の方はいかがですか? 24期の住所変更者
---加納 岩坪 磯見 25期---樋口

24期 坪井 陽典

*いろいろと御苦労様です。なかなか大変そう
ですが、今後ともよろしく願ひします。

14期 清家 雅幸

*ここ数年山から海へ転向して、ヨットや釣り
を楽しんでいます。今年は本当に久し振りに友
人家族と、お盆に白山に登り、子供達に海と遠
った山の素晴らしさを体験させてやりたいと思
っています。 15期 間所 新一

*遅くなりました。 24期 神谷 明延

*やっと自宅より通勤となり、家に戻れば子供
はそれぞれに家を出てしまっており、単身時代
とはあまり変わらぬ生活です。大学も角間に移
り段々遠く感じられる様になりました。現役諸
君の活躍を祈ります。 3期 登内 郁夫

*毎年、北岳とその周辺の山に2-3回程度登
っておりますが、若者の姿が少なくなっている
のを感じます。

現役の方々には、多くの山に登って、多くの
人に山を愛することを伝えてもらいたいもので
す。 19期 佐野 吏

*神戸から再び東京に移りました。

16期 金森 広

*今年4月より下記の通り住所が変更となりま
したので、ご連絡申し上げます。

29期 渋谷 敏行

*「やまざと」懐かしく読ませて頂いています。
あの部室が無くなるかと思うと本当に寂しい思



いです。ところで、私は3月26日に下記の住所に引っ越しましたが、皮肉にも4月1日で北九州市に転勤となり、単身生活を強いられています。とはいうものの5時間半で帰れるので、ほぼ毎週土日は鎌倉で過ごしています。

最後にOBの方々の時間を割いての編集作業には頭が下がる思いです。これからもよろしく願います。 18期 井上 茂良

*お世話ご苦労様です。3期 安藤 道子

*東京に変わります。忘れていて遅くなりました。 6期 合津 尚

*OB会便り楽しく読ませてもらいました。なかなか行事に参加出来ず残念です。

最近になり又山歩きに関心が出て来ました。8月に入り、日光白根山(2577m)を登って来ました。何年振りかの山歩き、自信になりました。

5期 川島 勇

*通信楽しく読ませて頂きました。

8/20(土) 香りん寿し(黒門下)において22期7人が集まって同窓会を開きました。その後、金大跡地を歩いて片町へくり出しました。

「十何年の時をとびこえて、すんなりとみんながなじんしてしまう。ワンゲルってやっぱりすごいネ!」はBURIからの葉書です。ほんとに楽しい一晩でした。

なお、今回22期の住所・電話番号が全員把握できましたので追って連絡致します。

22期 森 恵利子

*北陸・富山の出身の私の辞書には、「水不足」という言葉はありませんでしたが、今年の知多半島の異常渇水には、水の大切さを思い知らされています。

ワンゲルで学んだ水の管理で、急場をしのいでいる今日この頃です。25期 金山 裕之

*遅れて申し訳ありませんでした。最近金沢へ

もなかなか行けなくて、遠い存在になってしまいました。

正月皆集まって飲んだ頃が懐かしいです。

16期 山内 政司

*OB会役員の皆様 御苦労様です。

女房に押されてテントを購入し、親子3人でオートキャンプ場へ行ってきました。しかし、あれだけ整備され、又、RV車の展示場みたいな所で、キャンプの雰囲気としては今一つ満足できないものでした。熊や暴漢に襲われることはないでしょうけど。 16期 清水 重仁



*たいへん遅れてすみませんでした。

22期 黒崎 敏男

*ごぶさたしています。振込遅くなり申し訳ありません。OB会でのいろいろな対応、本当にご苦労様です。

OB会誌楽しく読ませてもらいました。特に山小屋の特集はなつかしく思います。次の機会に、山小屋へのルート(ダムから)山小屋の状況等、知らせてもらえたらと思います。

9期 平村 耕作

*会費納入遅れて申し訳ございません。少し先ですが、40周年楽しみにしています。よろしく願います。

9期 白井 勇

*払い込みが遅れて申し訳ありません。貴部の益々の御発展を祈念申し上げます。

7期 四十万 利之

*今年に入って、岩間の噴泉塔と、太田のトチノキ(白峰)を見に行った(仕事で)のが、山とのわずかのつながりです。息子は今夏、町内からの白山登山に行ってきましたが、私の方は山とは無縁の生活が続き、頭も足腰もガタガタです。

15期 松林 知一

*送金のことすっかり忘れていました。申し訳ありません。今年の夏は何かと忙しく、今まで8年続けてきた夏休みの家族登山もできませんでした。一年がかりで改修していた白山自然保護センター中宮展示館が8月10日に新装オープンしましたので、白山麓へ来られる時に立ち寄っていただけたらうれしいです。

15期 上馬 康生

*遅れてすみません。今春、小立野「若葉」に行く機会がありまして、学生がいないのにびっくりしました。キャンパスが移転し、たむろする場所が変わったのでしょうか。今の学生の好みが僕らと違うのでしょうか。

15期 鈴木 良紀

*舟田さんの督促状の怒りの文面を見て、あわてて会費を納入する次第です。誠に申し訳ありませんでした。6月11日に名古屋地区のOB会(柴田夫妻ら7名参加)をやりましたが、楽しい一時を過ごしました。15期 祖父江 直久

*申し訳ありません。夏はあれこれと忙しく、会報にはさんだまま、すっかり忘れておりました。他の方々も似たりよったりではないでしょうか。フォローして下さる方の有り難さが身にしました。今後共、よろしくお願い致します。夫婦会員の会費の扱いがよくわかりませんのでとりあえず夫の分1万円、妻の分5千円を入金します。

15期 宇野 潔

17期 宇野 和子

*遅くなって申し訳ありませんでした。

15期 三宅 毅

*言い訳めきにして、誠にすみません。振込額の1万円超過の分は、延滞料、心配料、イライラ料、etc としてご笑納下さい。記録的な猛暑も今となっては思い出。秋たけなわの好シーズンの到来です。しかし自分には山スソのドライブでも楽しむのか精一杯というところでしょ

うか。何かとご苦労様です。これからもよろしくお願いいたします。8期 山村 嘉一

*7年余り暮らした金沢と1年半の単身赴任生活に別れを告げました。息子は今春大学生となり独立し、中2の娘との3人生活が始まりました。先日称名滝から大日岳へ日帰りしました。紅葉が素晴らしい。大日平小屋ほぼ完成。

11期 小山 清

*遅れてごめん。生活苦の中、送ります。

15期 増田 富雄

*遅くなり申し訳ありません。いつも連絡をいただき、ありがとうございます。教え子が早くも社会人となり、職員室で席を並べる年齢となり、月日の過ぎたことをあらためて感じています。OB会のおかげで古き(?)懐かしい人達との再会ができた、連絡ができた、で、若返っています。

14期 浅見 裕子

*OB会費たいへん遅れて申し訳ありません。卒業してもうすぐ20年。ずっと遠ざかっていくばかりでしたが、また少しでも身近に感じる事ができて、嬉しいかぎりです。今後ともよろしくお願いします。

19期 石田 千絵

*主人がオランダ勤務となりました。

(夫人より)

4期 高田 昌嗣



マタタビの香りをかぐと、ネフはよだれをたらし、よっぱらったようになる。人間も実を薬用酒にして……いい気分。

跡地活用に、夢、広がる

金沢城フェスティバル'94



県内外からの来場者でにぎわったフェスティバル

＝金沢城内

県内外から
2万5千人
加賀万歳など楽しむ

フェスティバルは昨年十一月、今年三月に引き続き三回目の開催となる。同実行委員会によると、今回は荒天の影響もあり、目標の三万人をやや下回る約二万五千人が来場した。舞台では加賀万歳や四葉流包丁式などが披露され、石川門下では友柳半太鼓や獅子舞、茶席も行われた。また、今回初めて奥文三十三間長屋の内部を使用し、金沢城写真展や大名生居座を実施したほか、百万石茶屋と名付けて特産品も販売した。会場を訪れた人の中には「広い敷地、何にでも利用できる」と、小松市内の主婦(一)今後の活用が金沢市の将来の姿にきになるのでは(金沢市内の会社員)など金大移転後の利用構想に関心を寄る声も聞かれ、実行委員会の土肥淳一(県観光課長)は「イベントを楽しむ

県と金沢市が主催する「金沢城フェスティバル'94」は三日、金沢城内を舞台に行われ、県内外から訪れた人々は伝統芸能の舞台や写真展、特産品の展示販売など多彩なイベントを楽しんだ。一方で、来年三月には現在城内に唯一残っている金大事務局が移転するにあつて、約二十五万平方メートルの広大な城内キャンパス跡地の将来的な利用方法も課題となっており、参加者はフェスティバルを通して、加賀百万石の伝統や文化はもとより、金沢城跡地活用の無限の可能性に思いを巡らせた。

広大な敷地を実感

むばかりではなく、金沢城について学び、今後の利用法を考える一つの機会になつてほしいと話している。

平成6年(1994年)11月8日(火曜日)

中心部活性化

金沢市の中心部には、市が「金沢城跡地活用計画委員会」を設置、昨年三月に整備計画を策定した。この中で、跡地利用は「自然環境の保全、文化財の保護に配慮し、緑、空間を最大限に生かした一般市民に開放する公園的、文化的利用」を基本方針に据えている。

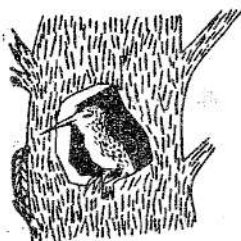


金沢の町づくりの課題となる金沢城跡、県庁、金大附属小中学校一帯
＝北国新聞社へリ「あすなろ」から

30秒の“空き地”活用策は

金沢市の中心部には、市が「金沢城跡地活用計画委員会」を設置、昨年三月に整備計画を策定した。この中で、跡地利用は「自然環境の保全、文化財の保護に配慮し、緑、空間を最大限に生かした一般市民に開放する公園的、文化的利用」を基本方針に据えている。

りまとめ、来月にも最終答申が出される見通し。金大附属小中学校跡地は同市役所庁舎増築もいっしょに同市が取得の希望を県に伝えている。県都の中心部に浮かび上がった計約三〇・二秒の広大な跡地利用は、使い道を悩めば中心部の空間化を招きかねない。さうに城跡、附属小中学校跡地はいずれも国有地であり、取得費の財源確保も欠か



駐車トラブル

「悪質なら奨学金で考慮も」

強硬姿勢で対立拍車

金大角間キャンパス



路上駐車の際が並ぶ金大角間キャンパス

経済学部 事故多発に業煮やす
学生 「別問題」と強く反発

金大角間キャンパスの駐車規制をめぐって学生と取り締まり担当者との間でトラブルが絶えず、経済学部が同学部生に「暴言をはくは悪質な行為があれば、授業料減免や奨学金減額も考慮する」と通知する事態となっている。交通事故の多発を理由とする学部側に対し、学生側は「事故と駐車とは別問題。全学に波及しかならない横暴だと反発している。問題の根柢には着目して考えられない昨今の学生生活があり、解決には困難が伴いそうだ。

角間キャンパスでの無許可駐車は常時二百―三百台に上るとみられ、約千四百台分の駐車場もパンク状態だ。路上駐車で見通しの悪い場所もあり、出合の頭の衝突事故も起きている。

同大では民間に巡回規制を委託しているが、巡回者が大学職員や学生に小突かれたり、脅迫めいたことを言われたこともある(経済学部教授の一人)という。当面は交差点付近危険箇所の駐車車両を金属製ポールで施設し、撤去させる方針だ。

経済学部補導委員は九月末、同学部の学生・院生に抗議文書は「駐車スペース確保の有効策がこれない」とを棚上げし、一切の犠牲を学生に押しつけている」と激しい調子だ。

大学側もバス会社に増便を求めているが、教授の一人は「車は若者のライフスタイルそのものであり、バスが便利になっても車は減らないうえ」と根本的解決には悲観的だ。

さて、今時の学生が贅沢なのでしょうか？

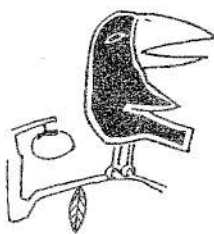
下にバス時刻表を掲載しました。造成中にはクマの足跡も残っていた角間キャンパス。終バスのことを考えたら、サークル活動どころではないといった環境にあるようです。

城内にあった頃、部員達は真夜中まで激論し、その後は片町・武蔵・小立野界隈と、頭を冷やしに繰り出したものでした。そのあたりこそが部活動であった方もあるでしょう。

この逆境(?)でワッゲル活動を続けている現役達は精鋭前!

金大行きのバス時刻表(金沢駅前発)

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
平	39	9	14	24	(39)	9	14	19	24	4	9	4	19		土曜休
日	49	10	34			49				39	39			()	学期休み
		38	49							54					運休
日祝	49		44	59		49		34		34	59				



いしかわの自然百景フォトコンテスト

特選に 上田 昭夫氏の「手取川夕照」

県では平成5年9月に県内の自然景観を代表し、将来に伝えるべき優れた自然景観地として「いしかわの自然百景」を選定し、同年10月から当該百景を対象としたフォトコンテストを実施してきた。118人から701点と多数の応募があり、撮影景観は93景に及んだ。「いしかわの自然百景」編集委員会(会長 粕野義夫 金大名誉教授)において次のとおり特選1点、佳作3点が選定された。

◆特選

上田昭夫(54) 石川郡野々市町 「手取川夕照」

◆佳作

井村 稔(56) 金沢市戸水町 「河北潟と立山連峰」

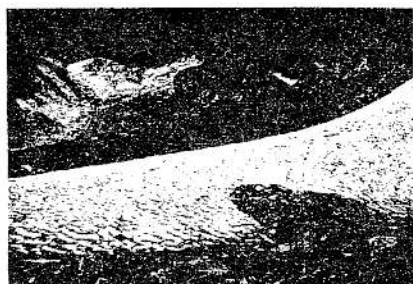
舟田節子(43) 金沢市橋場町 「夏のコントラスト」

森正太郎(53) 金沢市額新町 「春の白山」

商工石川 '94 11月号より



特選 「手取川夕照」



佳作 「夏のコントラスト」



佳作 「春の白山」



佳作 「河北潟と立山連峰」

山溪の「分県登山ガイド 石川県編」をナカオが担当することになり、事務局長もそのうちの13コースを拝命。写真撮影とコース調査に動いています。そのうち、自然百景と重なったものを応募して射止めたのがこれ。「テレフォンカードにして配ろう」と思ったら、版權は賞と引き換えに県に渡っておりました。

受賞の日、集合場所は環境部の廊下。ふむふむ、自然保護課はここかー環境政策課はーなんだ、梶さん隣の部屋に変わっただけなんだーと大発見した気になって、ふと見れば梶さんの姿。思わず手を振ってしまった私ー。勤務中なのにー。どこまでもミーハーな事務局長なのでありました。



時の流れは早いもので、金大ワングル部に籍を置いた時から、かれこれ三十年にもなろうとしています。当時、山が好きで入部はしたものの、シニアに入った頃には活動をやめてしまい不真面目な部員でした。

それが六年前のワングル部創立三十周年山行に、職場の同僚で若手OBの大川さん（27期）にお誘いを受け、白山に登ったのが、また登山を始めるきっかけとなりました。

記念山行では、南竜までの長かったこと。若いOBや現役に混じって、ゆっくりとした足どりでどうにか南竜にたどりついた時には、辛かったことも忘れ、ワングル当時の熱い思いが蘇ってきたのです。

それから六年。舟田さんに紹介していただいた（编者注：頂上ワンデリングが同じパーティでした）くろゆりクラブに入り、北陸百山の登山を一つの目標にしているところです。

私が登山を始めるまでは海行き専門の主人でしたが、今では「今度は何処へ行こうか？」と、土・日を楽しみにする程、山好きになってしまいました。

オレンジ・ロードと称する「石川門—御前峰完歩（完走）コース」は、20周年25周年に実行されていました。卒後10年たってもその血をたぎらせていたOBがいます。

今年の夏は天気にも恵まれ、主人と二人で（時には、末娘がついて来ることもありましたが）北アルプスの方へ、何度か行ってきました。どこの山へ行っても、頂上に立った時の感激は、その山でしか味わえないものですね。

その中でも剣岳は印象的でした。距離が長く苦しい尾根歩きを覚悟しながら、馬場島から早月尾根のコースを選びました。というのは、剣岳は初めての山だし、少々不安を抱きながらも岩場の少ないこのコースをあえて選んだのです。

朝発って、お昼過ぎに早月小屋に着くまで、ガスの中をただひたすら歩き続けるだけの苦しい歩き。しかも、小屋に着いてからもガスで視界ゼロ。それでも小屋の前の広場で寛ぐうち、ガスが切れて剣の岩峰が目の前に現れた時には、長い尾根歩きの苦しさも吹きとぶ思いがしたものです。また、夕食後、沈んだ夕日に剣の稜線がくっきりと浮かび上がる様や、雲海の中に大日岳や奥大日岳がどっしりと大きな山容を見せる様は、何ともしやうのないものでした。

これからも、自分の体力にあった山登りで、山の楽しみを増やしていきたいと思っています。あわよくば、何処かの山で、金大ワングルのみなさんに出会えることを期待して…。

日

本の夏、キンチョーの夏、正しい夏が存在した今年。その暑さにとち狂ったのか、怪しげなアンちゃん白山に出没。その変人とはマウンテン・バイクを2702メートルの御前峰頂上まで持ち上げてしまった男、竹内和彦くん。なんなんのアンちゃん。その奇人廻りに恐れおののく人。ただただ口をポツカリ空ける人。強陀ヶ原で乗れるし「イネー」と妙に納得してしまう人。中学生の一群からはヤンヤンヤの喝采。その日、銀座と化した砂防新道をすれ違う人々の反応は様々でした。果たして彼の心中にいかなる思いがあったのか……それは定かではありませんが、私達同行の者はひたすら同じ旅とは思われないよう一歩さがって行動。しかし彼が本当にピークまで笑顔で上げてしまった時、爽やかな一陣の風が同行の胸の中にも吹いたのでありました。折しも山はもう秋の気配を見せ、崖抜けに青い空は粉れもなく秋の始まりを告げていました。

ワングルバカは十年経つても変わっていない。ちなみに彼は、愛知県の高松教師です。



金沢市黒崎町 大野 直子

（27期）

自然人13号（'90年秋）より

編集長から依頼されたものの、何しろ、いい加減を絵に描いたような会のことであり、こうして書くのもおこがましいのだが、金大ワンゲルOB会を名乗る以上、その実体を明らかにしておく必要があると思い、ここに記すことにした。

今を遡ること10年余、1984年5月の連休に、久富、深田、松下、梅の4人で笈ヶ岳へ登ったのがそもそものきっかけといえようである。あまりの気分のよさに、来年は白山、次はまた笈ヶ岳といった具合で、途中からは栃尾も加わり、“春のPW”として現在も続いている。

ところが、2年ほど前から、何がどうなったのか、鎌倉在住の松下を除く4人が狂ったように登りだしたのだ。百四丈の滝や崖など、沢もやり始めた。もちろん、それまでも各人で山は続けていたのだが、一番登っていた小生でも年間十数回程度であったものが、1993年の手帳には、低山ハイキングを含め42回の山行が記録されている。このうち約半分がメンバーのどれかと登っている。4人がそろふことは少ないが、上馬さんと山行を共にする機会は増えた。

このようなことになった要因として、まず週休2日制が挙げられるし、互いが刺激しあったということもあるだろうが、やはり、何といっても気心知れた仲間と行く楽しさによるところが大きいのではないかと考えている。

そんな折、昨年(1993年)の11月ころだったか、北国新聞社の月刊誌「アクタス」の記者が、加賀能登の名山(カラー見開き)の連載を引き受けてくれそうな山岳会を紹介してほしいと職場(県自然保護課)へやってきた。いくつか候補をあげたが話がまとまらず、結局頼み込まれてしまった。メンバーにも相談し、何とか引き受けることになったのだが、このとき、どうしても会に名前を付ける必要に迫られ、初回の原稿締切りの前夜、苦しまぎれに国語辞典を数回開いたページの中から決めたという無責任さで、深い意味はない。もちろん、ヤブこぎは嫌いではないが、好きでたまらぬというわけでもない。どちらかというと、気がついたらヤブの中にいることが多いというのが当たっている。

一応、これまでに「アクタス」に執筆したメンバーとその山を紹介しておこう。○の数字は、掲載月である。

- 上馬 康生(15期)自然保護担当(顧問) ⑧白山
- 梅 典雅(19期)環境政策担当(企画係) ①笈ヶ岳、②三村山、⑤大山
⑦妙法山、⑨四塚山
- 栃尾 俊治(20期)生産技術担当(装備係) ③猿山、⑥鳴谷山
- 久富 象二(20期)労働金庫担当(食料係) ⑩大門山
- 深田 進(20期)現場監督担当(記録係) ④医王山、⑪大日山



さて、これから「グループ・薮」はどこへ行くのか、それはだれにもわからない。ただ、「アクタス」はあと2年はあるし、当分の間は、県内の山を中心に、山スキー、沢のぼり、県外遠征、他の山岳会との交流登山、反省会などを散りばめつつ、山頂のビールと下山後の温泉というオジサン的快樂山行を続けていくに違いない。



去る7月28日、21期の連絡員をお願いしていた 江口 喜美江さんが病死されました。まだ若く、二人のお子さんを残しての逝去に胸が痛みます。

追悼文を同期の榎さんをお願いしました。21期の連絡員は、山口 克己さんが引き受けて下さいました。

喜美江ちゃんのこと

21期 榎 陸美

一昨年の夏、喜美江ちゃんの家族と私たちの家族は白山で一緒になった。尚志君も友加子ちゃんも白山は初めてだったが、室堂まで元気いっぱい登ってきたようだった。「子どもは元気やわ。私の方がバテた。」と彼女はご主人と顔を見合わせて笑っていた。この時、喜美江ちゃんの体が大変なことになっていたとは、もちろん誰も知らなかった。

その年の暮れ、喜美江ちゃんは大腸ガンの手術のため入院した。彼女は自分の病気をはっきりと知っていた。今どんな状態なのか、そのためにどういう治療をしているのかということを中心にきちんと把握していて、会ういつも私にも詳しく説明してくれた。大腸の方は、きれいになったのだが、今度は肝臓に陰があるという。深刻な状態であったはずなのに、しっかりとした話しぶりに、私は心のどこかで安心することができたことを覚えている。

翌年の7月、子ども達の夏休みに合わせて、再び検査入院になった。子ども達は、ご主人の実家（愛知県）で過ごすことになっていたのだが、せっかくの夏休みに子ども達に何もしてやれず、さみしい思いをさせるばかりだということをとてにも気にしていた。尚志君は尚志君で、学校で「ぼくのお母さんは夏休みに、がんばって病気を治すために入院します。だから、ぼくもおばあちゃんの所でがんばります。」といていたそう。

できるだけ、自宅で療養したいという喜美江ちゃんの強い意志で、夏休みが明けて間もなく退院することができた。通院しながらの生活はかなり大変だったようだ。「病気を治すのが私の仕事。病院へは仕事をしに行っていると考えことにした。」と自分の中で一生懸命に割り切ろうしているようだった。しかし、「掃除もごはんもいっぱい手抜きしてるんや。主人は、何もせんでいいよっていつてくれる。子どもには、うんうんって話聞いてあげられるだけでもいいかなって思ってるんや。」と話す彼女に「そうや、それが一番いいよ。」と答えていた私は、彼女の言葉の後ろにある辛さをどのくらい理解していたのだろうと、今になって思う。

喜美江ちゃん自身の病気と真正面から闘おうとする強い意志と、家族の暖かい応援の中で、病気ははじめ奇蹟的なほど回復していたらしい。しかし、今年の4月、ちょうど喜美江ちゃんの誕生日の頃、再び入院となった。6月末にはかなり元気になり、もうすぐ退院できると、とてもうれしそうだった。が、退院して五日後、再び入院。息苦しそうに肩で息をしながら、薬のせいで眠りに落ちていくあい間、あい間に、一生懸命に容態を説明してくれる。膨れ上がった足がとても痛々しかった。「また来るからね。」といて病室を出たとたん、涙があふれてきた。

その二日後、私は南竜で職場の仲間と呑気に流れ星を見ていた。ちょうどその頃、喜美江ちゃんは、静かに遠くへ旅立っていたのだった。

喜美江ちゃん、天国で安らかに眠ってください。

私が「不況と違う理由で ヒマになった」わけ

23期 鳥越 伸博

先日、編集長の舟田さんから「7月に発行したOB会報の編集後記に書いてある（といっても、これは舟田さんが書いたのですが）私が『不況とは違う理由でしばしヒマになったこと』について、知りたいがっている人がいるだろうから、次のOB会報に書いてほしい」

と、突然、原稿依頼を受けました。

自分としては、あまり褒められた話でもないし、どちらかと言えば、恥ずかしい部類の話なので、こんな所で暴露したくもないのですが、考えてみれば、これも「ワンゲルOBの山での事故の話」（?…そんな大袈裟ではない）かとも思い、編集長の意を汲み、あえて紹介することにした次第です。

それでは、話の本題に入ります。今程「事故の話」と言ったので、結論から先に言いますと、「春スキーに行って、転んで膝下の骨を折って、2ヶ月入院していたので、しばしヒマだった」というのが真相です。以後、多少恥ずかしさもあるので、自分のことを「T君」として、事の内容をお話しします。

今から半年程前の、5月14日、15日の2日間、職場の仲間20人程で、立山へ春スキーに出掛けました。スキーがとびきり上手いというわけではない初参加のT君は、多少緊張気味に出発しました。

14日は快晴で、朝一番のケーブルに乗り、9時頃にはびくりに着き、しばし休憩の後、雷鳥沢へと向かいました。一度雷鳥沢のテン場まで滑り、剣御前山荘へ登り返します。T君は日頃の運動不足を痛感しつつ、快晴の立山を楽しみながら、何とか剣御前山荘に着きました。

昼食をとった後、もう少し足を伸ばし、剣沢の小屋まで行ってみようということになり、5-6分で剣沢まで滑り降りました。T君は、剣沢小屋の前から、まだベトリと雪のついた剣を穴のあく程見て、大感動に浸っておりました。当然まだこの時は、我が身に災難が降りかかるうとは夢にも思わず…。

途中で剣を振り返りつつ、剣御前へ登り返し、いよいよ雷鳥沢を滑ることになりました。雷鳥沢上部はさすがに急なので、スキー無級のT君は、シュテム・ターンに毛のはえた程度でゆっくりと降りて来ました。半分程来ると傾斜も緩くなりました。余裕を持って滑れそうだなと思って滑り出し、2-3回ターンしたその時、ドーンと前へつんのめるように転んでしまいました。

スキーが外れなかったのに、足を捻ったなという感じはあったのですが、その時はせいぜいネンザ程度と思い、とりあえず、下までゆっくりとボーゲンで滑り、そこからみくりが池まではストックを杖がわりに、何とか戻って行きました。さすがに宿へ着くと、足をついて歩くことは出来ませんでした。

そして翌日金沢へ帰って医者に見せると、先生はレントゲン写真を見ながら

「骨折してますねえ。手術しなきゃいけないですねえ。」

…このようにして、T君の2ヶ月に及ぶ「ヒマな日々」は始まったのでした。

P.S. おかげさまで、現在は、10cmの程のボルト2本がまだ入ったままですが、ほぼ元通りに戻っています。やはり、山には思わぬ事故の要因が隠れていることを痛感した出来事でした。

（単に、スキーが上手くなっただけ…という声もありますが…）



フィールド。ないし話

(33)

た身には、日知り山の山の知識は意外と少なく、それすらブラシクのためあてにならない。新聞や山岳雑誌の山行企画を採してみたりしたが、これにも眼界があった。

その矢先、犀奥の山々の名を活字で見たのである。犀奥は、倉谷に山小屋を持ち、高三郎山で新入生トレーニングを行う金大ワンゲルにとってまさにフィールドであった。懐かしい山の連なりが眼前に浮かび、涙が出る思いであった。

一日読み通し、翌日、ナカオ山岳会の林代表に入会希望の手紙を出す。ちなみに、同会はずれまで女性会員は未婚に限っていた。ワンゲル歴がものを言ったのか、会員の場にはべつたた眼力ある猫ちゃんを身をすり寄せて来てくれたおかげか、入会許可がおりた。夫には、入会

ないし話をしたくても、介の夫婦にとつての現実には、フィールドを持つことすらまだ難しい。今回は、元山友の主婦が社会人山岳会に入り、家族も巻き込んでのファミリー登山を楽しむにいたった話。

それは四年前の初夏、書店で金沢ナカオ山岳会の一かが・の「と白山」を目にしたところから始

3男を背中に担いで ゴロ寝族の夫も大変身



へは子連れが可能だったから引け目は半減した。子供たちは、クワガタ、イモリ、ヤゴなどの動物が抱同遊だった。

さて、いよいよ休日ゴロ寝族だった夫の登場である。きつかけは悪いが、子連れ登山であった。またしてもものごとには経胆した女房の「せめてくるゆり

ピーキアに担いでのファミリー登山はフル回転中である。近郊だけでなく、泊まりがけで火打山、奥穂高へも足を延ばした。

くるゆりクラブには、こんなないし話をかかえた家族はいっぱいいる。自然はあなたを待っているのだ。

え・林 正博

フィールド。ないし話



舟田 節子
ふなだ・せつこ 河北郡津幡町生まれ。金沢大学理学部卒業。学習塾指導者。金沢ナカオ山岳会会員。金沢市橋場町。37歳。

まる。二人の子供の手が離れ、ささやかな刺激をそれなりに執念にのって、山登りの虫がうすだしてしばらくのころのことであった。

子供のころから父に連れられての小屋泊登山登山、金沢大学ワンダーフォーゲル部での新入生山行の四年間と、山は常に身近にあったが、結婚、出産、育児で途断。山へのあこがれがくすぶら続いていた。次男のオムツがとれかたつたころからハイキングを試みてきたものの、泊まり山行を断念してき

と次回の山行予定、事後報告後に引かぬ性格をあきらめられていたらしく反対はされなかった。

十年近いブランクだっただけに、再開したのでこの山行は死に物狂い。しかし自然は美しく山仲間温かく、汗は快かつた。月二回の山行、その日のた

氏の方も山の留守を預かってるんだ」と冷やかされていつ、出席率は三位につけていた。何のことはない。会の山行しか機会がなかったから、ひたすら都合つけた結果である。

さらに、会がくるゆりクラブ(北陸の白山を登る会)のお世話をすべく、その山行

のあきれ顔を覚えて、三男をへ

ナカオと私

(金沢ナカオ山岳会 30周年記念誌

'92.11 発行より転載)

15期 舟田 節子

「ナカオ」を知ったのはかなり古い。十周年記念の「犀奥特集号」を、学生時代に耳にしている。高三郎をホームグラウンドと心得る身には、シマ破りと思える情報であった。しかし、暇な学生ではなく社会人であることに畏怖の念を覚え、かつ、仲間がいるから山に登るといった感傷に溺れていた時期でもある。卒業後の器にといった発想は微塵もなかった。そしてお年頃の身は、身上書等も用意したけれど、登山が趣味とは書くのも憚られる時代。ましてや相手に同じ趣味を望むべくもない。常識的には、ここで山から足を洗うことになるはずだった。

「かが・のと白山」を媒介としての入会は、朝日新聞の「フィールドないし話」に詳しい(そんな一流新聞に載ったのも、ナカオのおかげである)。あれには書けなかった思いがけぬ妊娠の理由―実は冤がからんでいる(墓場へ歩いていくはずの類の話なのだが)。

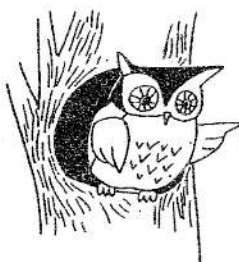
学生時代にも諦めざるをえなかった冤が、春合宿の地と決まった。月二回の山行をようやく確保できた身にとって、連休三日の「わがまま」は、到底さらりと言い出せる話題ではない。良妻賢母に磨きをかけて、要するに「失敗」してしまった!

ここに、神の人知を越えた采配の妙を思わず

にはいられない。最悪(?)の事態が思いがけぬ展開を見ることになる。濡れ衣の責任をとられ、くろゆりの山行に洪々保護者同伴で参加した主人が、四十にして山に目覚める。まさかのファミリー山行が始まり、六年後には、いわく因縁の笈ヶ岳に夫婦で立つことができた。「夢のまた夢」とはこのことだ。三男坊の名誉にかけて彼は決して失敗作ではない。「神の啓示」で授かった子である。

今は、会の「社会性ある登山」「生涯登山」のスローガンを、最大限拡大解釈させていただいて、子連れ山行を続けている。子連れの迷惑、興醒めの方は、「参加することに意義がある」で勘弁してもらい、少しでも接点を持ちつつ同行がかなうよう奮戦している。

とはいえ、いずれ三男坊も離れていく。その頃には、ナカオで知り合ったと錯覚しているような夫婦が残るのかもしれない。



---こんなにページを占有していいものか---迷う所ですが---

今回は、急遽OB会報の単独発行を決めた前回よりは時間の余裕があり、若干の執筆依頼を行ったのですが---相変わらずの結果でした。

昔からBHの編集長は馬鹿をみるものと決まっていた、それはOBに昇格(?)しても変わらず---給料をもらう身になっても、人の親になっても変わらないのですねえ---

できることなら、公平、第三者の冷静な視点で編集を進めたいという願望も、どこか一人相撲になってきて、まずいなあと思いつつ、でもこれだけのエネルギーがなければ、OB会報なんて所詮出来上がらない---「編集長なんて、いつでも替わってやるぞ!」と開き直り、なおも駄文は続くのです。

今年、ナカオのゴールデンウィーク前半の合宿は、滋賀県の己高山・金糞岳でした(次に発行する本の調査のため)。食料係を拝命した私は、久々に鍋でご飯を炊きましたが、鍋の蓋に重石を乗せたり、炊き上がりを逆様にして蒸らす等、昔習った通りのテクニックを駆使。「さすがワンゲル仕込み」と喝采を浴び、「武器」でほかほかご飯を口に運べば、やはり思い出されてくるのはワンゲルの頃のことでした。

今こうして社会人山岳会に所属してみると、どんなにワンゲルで、岳人としてきちんと仕込んでもらったかが、かえって認識できるのです。ファミリー登山の時のコースはもちろん私が選定しますが、(旦那は、突発的に言い出すだけと思っているらしいけれど)避難ルートを考慮し、天候を見定め、行動食や水の量を決めるのも私---こういうことが身につく、山行の余裕となっているのは、何といてもワンゲル暮らしの成果です。

でも、多くのOBには、あるいはそれが逆に意識の上で足枷になっているのかもしれませんが。山というと、山のような荷物、やたらと時間のかかった審議、ツーカーの仲間もない---これらがかえって、かつてのワンダラー達を山から遠ざけているのでは---とも思います。

(以下は現在山離れしているOB向けの文章です。)

かつて、私にもワンゲルがやたらと遠い時代がありました。今、若いOB達もきっとそうだと思いますが、社会へ出てどうにか名刺が板についてきた頃に徐々に仲間の結婚が始まり、披

露宴が同期会替わりとなり、それらが一段落ついたあたりから誰かが音頭をとっての同期会が始まります。時には思いかけぬ計報が混じりもします。それらの時、男なら礼服を取り出し、財布を持てばどこへだって行けますが、女の私にはやはりハンディーがありました。家族の衣食・住の段取りをつけてからでなければ動けない…反対されたとかではなく、自らあきらめるしかありませんでした。地元においても、4回の転居もありました。家庭の基盤作りの時期…もう必死で、余裕もなくて、ワンゲルなんて化石で埃を被っている状態でした。

そんな頃も山は思い出したように行ってはみましたが（医王山とか、小松の勤山）、家のローンの金額に怖じ気づいて車も手放していましたから、頼るのは公共交通機関。時間はかかるし、子供達は山に入る前にくたびれてしまい、帰りはそんな過疎バスの時刻を気にして歩かせねばならず、かえってストレス一杯で帰宅するはめにもなっていました。白山もあまりに遠い山に思えていました。

そんな生活が、今日のように変わったきっかけは、ワンゲルからの25周年記念山行の案内でした。封筒の裏のこ汚い「金沢大学ワンダーフォーゲル部」の文字がなんだかまぶしいようでした。こんな機会でもなければ子供達を白山に連れて行ってやれないと思い、子供二人の分も申し込みました。それでも心配で、確認の電話をかけてきた大川さん（27期）に「大丈夫でしょうか？」と聞いたら、彼女「白山なんて、子供も年寄りも登ってますよ。」と、軽くのたまったのでした。そして記念山行の当日、小二と年長の息子達は、優しい現役のお姉さん達に手を引いてもらい南竜に到着できました。（その後半は15期OB達はわがままを言って頂上ワンデリングに加わらず、別山を経由して降りてしまった。）

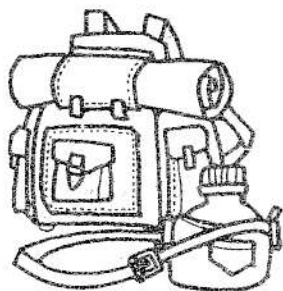
白山の前には訓練と称して、乗鞍や立山を往復してみました。北アルプスの連山を見て「帰ってきたぞ」の思いを強め、それは白山に登りいっそう強い思いとなってあふれてきました。

その次の年の夏山シーズンの始まりに、それまで避けてきた、書店の山の本のコーナーに久々に立ちました。それがナカオの「かがのと百山」との出合となり、山行を再会するきっかけとなりました。

ですから、ワンゲルの現役（現役という存在）には、たいへん感謝しています。あれから、高三郎へは二回登りましたが、二回とも現役達の新トレに出くわし、因縁の笈ヶ岳でも現役（正確には大学院生と5回生）パーティーと遭遇しました。そんなことがたまたま嬉しく、そしてOBとして胸を張っていたい気持ちが、山行の苦しさや、その後の不測の事態も乗り越えさせてくれたように思います。

OBと現役は、つながっている、そしてお互いが良い刺激を与え合う存在でありたいと思います。現役は心揺れる時、数多のOBを思い浮かべ思い直して欲しい。そしてOBの方は現役の情報からあの時代を思い起こし、できれば山に足を向けるようになって欲しい…ほんのわずかの時間で行ける水芭蕉の群生地とか湿原、そして白山や北アの連山を眺める恰好の展望台といったコースがあります。山歩きは生涯スポーツ。せっかくワンゲルで基礎を仕込まれているのだから、あとはやる気次第。OBになるまで続けられたからには、皆にそんな受容体は備わっており、小さなきっかけで連鎖反応が起きてくるように思います。

会報もその一つになってくれれば…せめて、会報の届いた日は空の青さが違って見えてもらえれば…と願っています。



今年（平成6年）の春、第8次を冠する白山-BHPWが計画されましたが、市ノ瀬から大汝までのピストンで終了しました。

そしてワンゲル初の、このルートを使つての夏合宿が、猛暑だったこの夏実施されました。

ルートについて、先に補足しますと、高三郎から見越山のかつてのワンゲル道はほぼ痕跡なし。ブナオ峠（五箇山刀利自然休養地として野営場他の整備が整えられています）から赤摩木古経由で伸びている登山道と合流する見越山頂から道はよくなり、奈良岳、大笠山では、むしろ馬鹿でかい標柱や、ベンチ・テーブルなどの設備に興醒めさせられる程です。大笠から、三方岩岳までは原始のままの秘境の山々が残されています。（大笠山については、今春から、境川ダム経由フカバラノ尾根コースが開通し、健脚向きながら日帰り山行が可能となりました）

水については、かつては行動中の最低限の水の全量を担いでいく方式でした。重量、嵩ともたいへんな負担をしいられました。現在は、多くの藪漕ぎパーティーが採っているように、現地で沢を下りて水を確保してくる方式が採られています。とはいえ、下りは10分程でも戻りは、水ボリを担ぎ、一日の疲労がどつとでてくる中で急斜面を一時間以上かけて這い上がり…死に物狂いの苦労があったようです。ミスターKUWV達の汗を讀えつつお読み下さい。

'94白山Party

夏合宿の記録

リーダー 山本 英男



8月4日（1日目）晴れ

オロロが襲いかかる中、必死の思いで新道とつきのテン場へ。早くも下山したい衝動と前進しなければならないという葛藤に苦しめられる。

8月5日（2日目）晴れ-曇

とりあえず高三郎を越えるということを合言葉に、うだるような暑さの中、夏合宿初めての

ヤブコギに突入。リーダーの判断ミスでテン場予定地のワンゲル平に着いたのは、就寝時間まであとわずかの午後5時。水たまりの水を飲んで一息つく。

8月6日（3日目）晴れ-曇

見越山南稜に出てヤブ明けの快感を知る。これからは、快適な登山が続くと思ったら、夏合宿の行程中、最悪の暑さを体験する。歩き始めて10秒程でサウナ状態となる。みんなで瀬波川の冷水を飲んで体力が回復するが、大笠山まで行けず、登山道の上にテン設することになる。今日も午後5時到着。

8月7日（4日目）晴れ

大笠山のフカバラの尾根から下山して再び三方岩に登りかえすという方法を思いつき、前日そのように決定したが、大笠山のピークに立って笈を見た時、ヤブをこいで笈のピークに立ちたいという気持ちに押され、とりあえず出発した。この日も大笠山の最低鞍部で水を汲む、宝剣のピークでテン設できそうな場所を見つけ、テントを張る。宝剣から見た笈は迫力があつた。

8月8日（5日目）晴れ

ようやく笈ヶ岳の山頂に立つ。感慨深いものがあったが、やはり笈のピークも蒸し暑かった。通称、小笈のテン場という夢テンまで行き、午後は久しぶりにのんびり過ごした。

8月9日（6日目）晴れ

今日の行程は仙人窟の池塘までなのでそれほど長くない。予定より丸一日遅れているが、とりあえず一日一日辛抱強く行きたい。仙人窟の池塘は噂通り快適なテン場だが、池塘の水は小さな虫だらけで、今まで沢の水を飲んでいた僕は多少の抵抗を感じた。ここから見た笈・大笠は白山山系の素晴らしさを全て語っているような感じで、やたら立派に見えた。

8月10日(7日目) 晴れ

2万5千分の1の地図では仙人窟の池塘からゴールとなる三方岩岳まで、もう目と鼻の先といった感じである。岩底バットレスの手前の岩峰群で景色を楽しんだあと、いよいよ国見山の急登にとりかかる。そこで、今日中に瓢箪山の展望台まで行けるだろうと楽観的に考え、持っていた水の大部分を捨てたのだが、これが大失敗であった。水を捨てて軽くなったにもかかわらず、進むスピードはあまり変化がなくて、結局午後7時、薄暗くなった瓢箪山頂上付近の溝にビバークするはめとなる。みんなさすがに疲れきって元気がない。ポカリを飲んで早々に寝る。

8月11日(8日目)

1Pほどで道のある瓢箪展望台に到着。ついにヤブから抜け出し、みんな多少疲れた顔をしているが、さすがにさわやかだ。スーパー林道に一時的に下りて、三方岩の駐車場でのんびり朝食を食べて、小屋跡のテン場へ行った。駐車場は観光客が多くて少し恥ずかしかったが、ヤブを抜けた今、そんなことはみんなどうでもよいといった感じだった。

8月12日(9日目) 晴れ

北縦走路を南下し、ゴマ平ヒュッテまで進む。途中、オモ谷に寄り道したり、快適な山歩きが続く。道があると、必ずいつかはテン場に着くという安心感があって、幸せな気持ちにすらなる。北縦走路では人に誰も会わず、北アルプスを眺めながらの登山で、僕はこのコースが気に入った。

8月13日(10日目) 晴れ-ガス-雨

いよいよ白山のピークに立つ日だ。僕以外のメンバーの全員は、白山のピークに行ったことがなく楽しみにしていたのだが、台風のせいか風が猛烈に強く、ガスがかかっていて展望は全くない。室堂は相変わらずの混雑ぶりで、下界

に来た感じさえあった。

8月14日(11日目) 雨-曇 沈澱

朝から雨が降っているので沈澱。寝たり起きたりの繰り返し。ヒマでしょうがない。食糧もたいしたものがなく、残りのミーティング食をすべて食べてしまった。

8月15日(12日目) 晴れ

別山を越えて、神鳩の宮避難小屋へ。このあたりは金大ワンゲルは何年か前に1度来たきりで、ほとんど山に入っていないようだ。小屋のノートには、都立大や、大東文化大のヤブこぎの記録があった。大日ヶ岳方面へは今回は諦めて、後輩に期待することにする。時間が余ったのでそのまま石徹白へ下山。水の豊かな町で、四方をすべて山に囲まれており、静かできれいな所だった。

8月16日(13日目) 晴れ

石徹白の小学校で昨日テントを張り、九頭竜湖から福井経由で金沢へ帰る。下界はどこも観光客だらけで騒がしく、ヤブにいた時とのギャップがはげしい。

下山したら感動がこみあげてくるのかなと思っていたが、いつもの山行と同じような、あまりパッとしないものだった。



トビ イラスト竹中 敏
自然人13号より

夏合宿感想

(現役紹介)

現役紹介を、夏合宿の一言感想で行うことにしました。もらった原稿はちゃんとワープロ打ちしてあったのですが、学年と、3回生については役職名を入れたくて、打ち直しました。

4回生は、10月下旬、そろって蒲原さんのお墓参りにでかけ、卒業までには蒲原さんの思い出を含めた一言を書きたいとのことでした。次回に回すことにします。

北アルプスHParty

若山 悟 (3回生 3M議長 理学部 石川県)

山はやっぱり晴れ山だと思った。毎日午前中にテン場に着き、それから昼寝。もう最高。晴沈もあり、とても楽しい山行だった。

福田 武志 (3回生 主将 文学部 京都府)

3年連続の槍ヶ岳、3年連続の360度パノラマ。もう文句なし。

浅野 嘉之 (2回生 教育学部 大阪府)

熱を出して申し訳ありませんでした。楽しいメンバーで、晴れた山行で、よかった。

神垣 聡美 (2回生 法学部 大阪府)

北アが満喫できてよかった。一度は行ってみたい山だと思う。

宮本 浩二 (2回生 理学部 富山県)

久しぶりの晴れた山行だった。青空を見飽きた山行だった。

岩倉 里英子 (1回生 工学部 富山県)

ふり返った時、自分の歩いた道のりに感動しました。山の空気は冷たかった。



老田 浩章 (1回生 文学部 石川県)

ド快晴で北アルプスにおぼれ、縦走できてとてもよかった。朝の雲海がよかった。

北アルプスIParty

柴田 祐介 (3回生 P審議長 経済 愛知県)

4:04急行北国一針ノ木雪渓一蓮華の大下り一針葉樹林帯の稜線一烏帽子四十八池一水晶岳一笠一御来光一高山手筒花火

新堀 由佳 (3回生 L会議長 文学部 富山)

3年目にして、はじめて夏合宿が成功に終わりました。リーダーの足をひっぱるばかりでしたが、楽しい山行だったので勝手に満足しています。

高石 拓男 (2回生 経済学部 新潟県)

軽装だったので山を楽しめた。全ルート歩けた満足感がある。日焼けできてよかった。

吉原 正敏 (2回生 理学部 石川県)

昨年とはうってかわっての好天で、全コース日程どおり消化できて良かった。針ノ木一烏帽子間は、人も少なく静かでいい山だった。

小泉 誠司 (1回生 理学部 広島県)

幸運だったのか、烏帽子以外はみな順調に進み、自分も最後まで体力ももち、よかった続きの山行でした。

小西 陽介 (1回生 文学部 茨城県)

北アルプスは素晴らしかった。もっといろんな山にチャレンジしたい。

南アルプスParty

藤牧 康子 (3回生 L審議長 文学 長野県)

ますます南アルプスが大好きになった。誰も病気、ケガをすることなく無事に夏合宿を終えた時は、リーダーとして、ホッとした。

戸田 良和 (3回生 副将 理学部 愛知県)

最後の夏合宿がとりあえず晴れていてくれたので、いい山行になったと思う。

金吉 史哉 (2回生 理学部 千葉県)

三伏峠までの道はとってもきつかったなあ。

友野 克利 (2回生 文学部 静岡県)

目指す3000m峰は6峰すべてとれて満足。久しぶりの3000m峰で、少しドキドキした。

西馬 由岳 (2回生 工学部 兵庫県)

楽しかった。ちょっと上回生の気分を味わえた。

勝俣 竜哉 (1回生 文学部 静岡県)

夏合宿に行って、とてもいい体験ができました。

阪本 京子 (1回生 文学部 群馬県)

少しつらい時もあったけど、景色がきれいで、とってもステキな山でよかった。

白山Party

山本 英男 (3回生 P副・OB係 工 神奈川)

最後まで行けず、心の中に結局何かひっかかるものが残ってしまった。ヤブこぎはつらいものだったが、あの中で得たものは大きいと思う。

小林 俊夫 (2回生 工学部 群馬県)

生きて帰れてよかった。この感動を、大好きなあの娘に分けてあげたい。

宇根 悟史 (2回生 工学部 大阪府)

一生忘れられない(だろう)経験をしてしまった。今から思うと、ヤブの中もけっこう楽しかったのかなあ?服の臭さと、(行動)水の中の水が印象的でした。

佐川 貴久 (2回生 文学部 栃木県)

何はともあれ辛い山行だった。暑さと、虫の多さは計算外だった。あとの喉の渇き。でもやっぱりヤブコギは楽しい!

三浦 永士 (2回生 法学部 愛知県)

真夏のヤブこぎは想像以上にきつかった。雨が降らなかったのが、せめてもの救いだったと思う。どんなに頼まれても、夏の白山-BHはもう絶対に行かないと、心に誓う。



八ヶ岳Party

山口 陽一 (3回生 行審議長 工 静岡県)

天候に恵まれて楽しい山行だった。

橋本 征治 (2回生 理学部 三重県)

野郎Partyでなくてよかった。

正善 久裕 (2回生 経済学部 大阪府)

去年がひどかっただけに、晴れた山はいいなと思いました。

牧原 弘明 (2回生 理学部 北海道)

みんな仲良く元気良く、さらに元気良く山に登れてよかった。

石谷 留美子 (1回生 工学部 富山県)

八ヶ岳は素敵なお山でした。楽しさいっぱいでした。

川本 幸代 (1回生 教育学部 岐阜県)

天気もずっと良く、楽しみながら山に登れてよかったです。メンバーの人達も楽しい人達ばかりだったので、あっという間の7日間だった。

西田 秀輝 (1回生 文学部 石川県)

ド快晴の中、八ヶ岳を完全制覇できたことが非常に良かったです。

行事報告 (94年度夏合宿以後)



・合ワシ 8/20~8/22

→医王の里△→三蛇ヶ滝→白瓦山→医王の里一車使用→角間キャンパス△→

C L 藤牧 (右含む3年8名、2年15名、1年7名、福井大学4名、福井工大3名、富山大学3名、富山女子短大6名、計46名)

・南アルプス深南部 P.W. 8/24~8/28

→水窪駅→営林署小屋△→中ノ尾根山→三又山△→トサナ山→笹ノ平△→池口岳→光岳→光小屋△→易老岳→本谷口→

L 佐川 S L 藤牧 友野、小林、三浦

・立山、大日岳 P.W. 8/24~8/26

→室堂→雷鳥平△→立山三山→別山→雷鳥平△→大日岳→室堂→

L 沢田 S L 福田 正善、牧原、川本

・蒲原良太郎君を偲ぶ劔岳 P.W. 8/27~8/28

→室堂→劔沢△→劔岳、前劔→室堂→

L 立川 S L 石川 奥出、奥、松浦、望月、伊藤、井村、岡田、宮崎、清水、朝日、田中、新倉、樫村、柴田、前田顧問、蒲原新太郎さん、蒲原道子さん

・雲ノ平、高天原 P.W. 8/30~9/3

→折立→薬師峠△→雲ノ平キャンプ場△→高天原→三俣蓮華岳→黒部五郎小舎△→黒部五郎岳→折立→

L 吉原 S L 若山 石川、清水、小泉

・94年度小屋作業 9/19~9/23 (小屋修復作業第2期工事-床板張り)

→犀川ダム→B.H.下△→犀川ダム→

C L 戸田 C S L 山口、柴田 P L 若山、山本、福田、新堀 (右含むOB1名、4年4名、3年8名、2年11名、1年7名、計31名)

ノアザミ



日本には、60種ほどのアザミがあるが、春から初夏にかけて大きくアザミはノアザミだけ。白山では夏にさくよ。

・北山川、熊野川 P.W. 9/24~9/27

→田戸△→瀬八丁→赤木川合流点付近△→河口付近△→新宮→

L 田中 S L 伊藤 新保、宮崎、福田、金吉、川本、岩倉

・飯豊連峰 P.W. 9/25~9/28

→温身平△→梶川尾根→カイラギ小屋△→飯豊山△→弥平四郎→

L 山口 S L 石川 奥出、新堀、小西

・口三方岳 P.W. 10/1~10/2

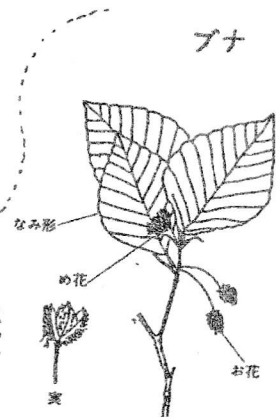
→登山口△→口三方岳→

L 牧原 S L 若山 宇根、小林、佐川、西田、石谷

・百四丈 P.W. 10/8~10/9

→丸石谷△→黒滝→

L 金吉 S L 橋本 奥出、石川、朝日、新倉、宮本、浅野



豆知識

石川県では白山のまわりに多いけれど、金沢市の戸室山や能登の宝達山、石動山、鉢伏山など低い山の頂上にも残っているんだよ。実は三角すいの形をしていて人間が食べてもおいしい!

犀川ダムから高三郎山までの状況

犀川ダムからの道は山菜取りの人達などが草刈りをしてくれているので、ひどい時でもどこが道かは必ずわかるといいます。危険な所は、出島から吊橋の間で何ヶ所か道が崩れかけている所があることです。踏み外すとダム湖にはまってしまうような感じです。吊橋を渡れば B.H. まで15分位の何の問題もない道です。

B.H. は今年的小屋作業で床板も張られ、雨漏りが少しありますが、十分に宿泊可能となっています。登山道から B.H. へは特に看板などはありませんが、皆さんが良く知ってらっしゃる頃のまま、変わっていないと思います。今、B.H. には落書き帳と麻雀牌以外のものはないので、宿泊なさる方は各自で必要なものを持参してください。

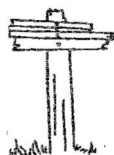
B.H. から高三郎山までの登山道は、ここ2年程小屋作業で小屋の修理をやっていたため、新道に関しては、本格的な整備は行なっておらず、部としての新道の使用は、ここ3年程あまりおこなわれていません。今では現役部員の中にも新道を登ったことのある人間は少なくなっているため、現在どのような状況かは詳しくはわかりません。旧道の方は、新トレ前に整備が行なわれているために現在も確実に通行可能です。注意する所は、前高三郎以後の道が5月頃から所々木の枝などが道にせりだしてきて歩にくくなることと、ピーク手前2ヶ所で道が急登になり少し崩れているためロープがあることぐらいで、それ以外は特に問題はなく通行できると思います。

皆さんがよく知ってらっしゃる頃と、高三郎周辺の環境はそれほど変化していないと思います。高三郎に快適に登れる時期はとても限られています。私も夏に B.H. へ行き、オロロの大歓迎を受けました。もし忘れてしまった方がいらっしゃれば注意してください。

文責 福田武志 (37期)

9 4 小屋作業報告

小屋作業CL 戸田 良和



昨年、老朽化が進んでいた山小屋BHの屋根が何とか張り替えられ、今年はいよいよ、床を張ることが使命となった。

春頃から、これに関する話し合いが3回生の間で始まり、計画としては、昨年に立てられていた案を引き継ぎ、具体的計画を立てていくことになった。

ところで、昨年大変苦労した資材搬入を、今回は春に行ってみようかという案が出た。春ならダムの水位も高く、資材搬入ボートがかなり上流まで入れるから一であったが、ボートを平日しか貸してもらえないことが分かって、この案は諦めなければならなかった。そして、やむなく、9月という水位の低い時期に行くことになった。

ところが、今年は異常な日照り続きで、ダムの水位が昨年以上に下がり、ボートが使えなかうか心配となった。しかし、9月7日に偵察に行った際、9月に入って雨が降ったこともあって、何とか出島付近まではボートが入れそうで、安心することが出来た。

9月14日に製材所に注文してあった木材が届き、翌日、この木材に防腐処理を施し、その他の資材はその後ホームセンターKURAYA等で調達した。

9月19日より小屋作業が始まり、2日目に、角間キャンパスからダムまでを学生課のトラックで運び、その後ダム所有のボートで出島まで、さらにその先、BHまでは歩荷を行った。

実際の作業は3日目の9月21日より始めた。土台としては強度に不安があったが、モルタルレンガ2、3個を積み、その上に角材を並べていき、その上にフローボードを張っていった。作業は予想以上に進み、22日の午後には床が張り終わり、その後23日の午後まで、ドアの製作、取り付けにあたった。(計画書、設計図参照)

<今後の課題>

今回、初日と4日目の午後に雨に降られたが、4日目の時に、屋根の方から2ヶ所雨漏りがあるのが見つかった。

原因は、屋根の一番上の梁が、上からトタンを被せてあるだけであったため、その梁から雨が染み込んで、それが滴り落ちていたのである。

とりあえず応急処置として、ビニールシートを屋根上から被せ、内部の方は、張ったばかりの床に落ちないように、ビニールシートを敷いておいた。来年の春には何とかしなければならぬだろう。

しかし、床を張ったことで宿泊可能となった。来年度は、内部の壁がコンクリートむきだしなので、そこに板を張るくらいであろう。

<ベルクハイムの利用について>

ベルクハイムは宿泊可能になったが、今後どれだけ利用されるか疑問が残る。

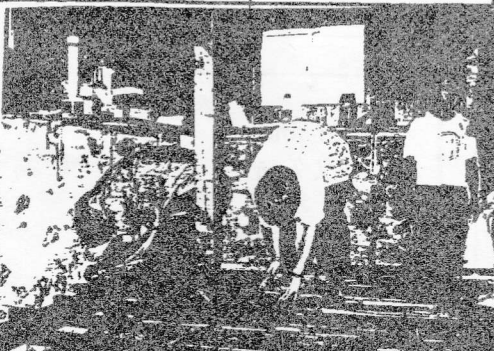
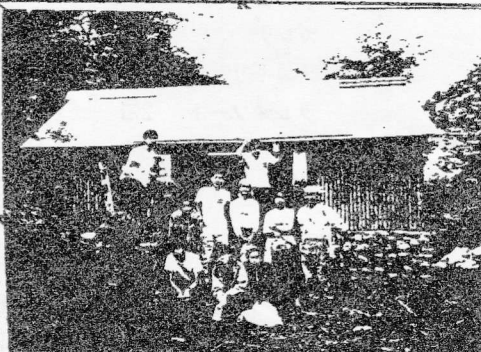
今回の小屋作業にしても、部員全体の雰囲気は、「やりたくないが、行事だから仕方なしにやる」という風に感じられた。また、春の新トレは高三郎であったが、それについて、下級生から反対の声があったのも事実である。それだけ、BHに対して、思い入れを持っている部員がいないということである。

昨年からの修復を行っているが、これは、土台や梁などがまだしっかりしていたから出来たもので、何年か先に、昭和49年の改修工事のような大規模な修復が必要となった時、それが出来るか疑問です。おそらく、とてもあれだけのことは出来ないと思います。

したがって、なるべく利用してこまめに修理し、少しでも長くもたせることが重要になると思います。

よって、今後、BHについて話し合われ、活発に利用する方法を考えていってほしいと思います。

(計画書、設計図については一部のみ紹介)

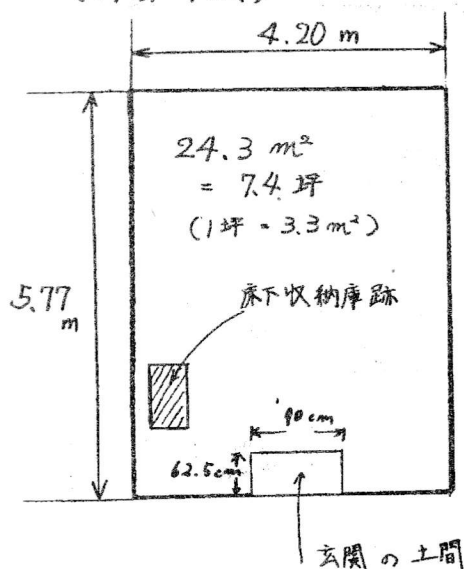
	A	B	C	D
9/15 (木)	作業日 準備作業			
9/19 (月)	入山日 - BH, テン場周辺の草刈り - 束石を置く 17:00 終了	入山日 - BH, テン場周辺の草刈り - 束石を置く 17:00 終了		
9/20 (火)	10:20までに合流点に到着, 荷役 - 歩荷 (リレー方式) 17:00 終了	10:20までに合流点に到着, 荷役 - 歩荷 (リレー方式) 17:00 終了	入山日 10:00までに犀川9Aに到着, 荷役 - トラップの荷物をおろす - ボートに積み込む - 歩荷 (リレー方式) 17:00 終了	9:00にトラップ着 - 荷物をトラップに積み込む
9/21 (水)	作業日 - 土台を組む 12:00で作業終了 下山	作業日 - 土台を組む 12:00で作業終了 下山	作業日 - 土台を組む 17:00 終了	入山日 - 土台を組む 17:00 終了
9/22 (木)			作業日 - 床板を張る 12:00で作業終了 下山	作業日 - 床板を張る 17:00で終了
9/23 (金)			作業日 - 作業の続き - ド丁を取り付ける 12:00で作業終了 下山	



ベル7ハム 修復 (2期工事) について

文責 戸田

<内部寸法>

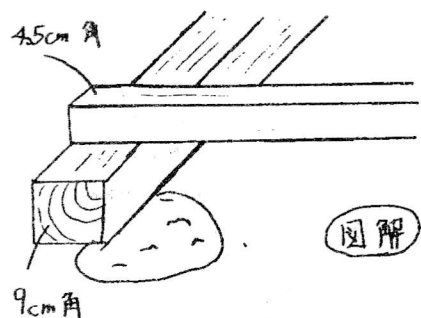


- ・ 床下収納庫を設ける必要はないと思われる。

<工法について>

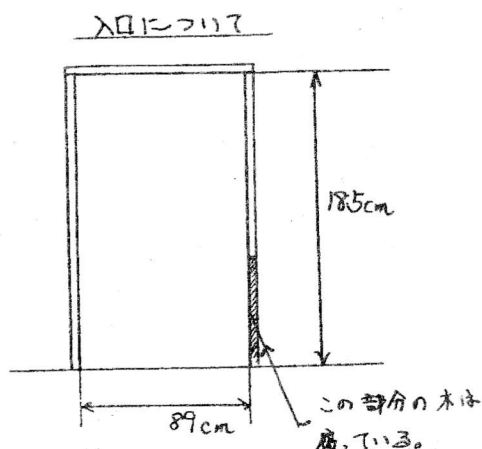
- ・ 石 (またはブロック) の上に土台となる木材を縦、横に並べて、その上にフローボードを打ち付けていく。

平面図を参照。



<注文した材料>

- ・ 9cm 角 $\times$ 4m 7.5本
- ・ 4.5cm 角 $\times$ 4.2m 20本
- ・ フロア板 (30cm $\times$ 180cm) 8坪分 (48枚)



小屋作業会計報告

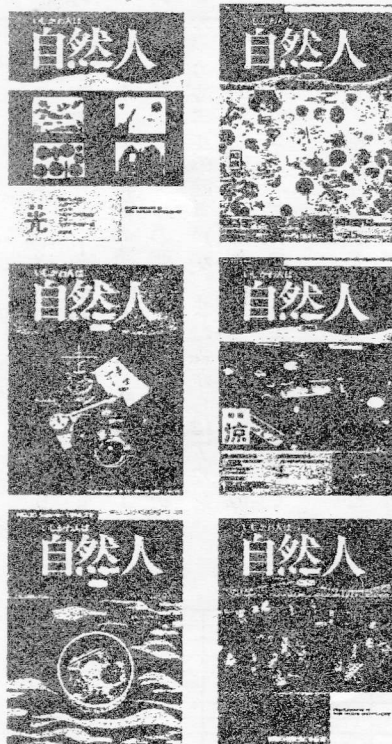
□収入 昨年度寄付金残金 269,085円

□支出

9/14	床用木材 (出村製材所)	94,000円
9/15	ドア用木材	5,849円
	その他材料 (税込み)	21,478円
	モルタルレンガ80個	4,000円
	水準器	780円
	カンナ	1,080円
	ノコギリ	1,280円
	クレオソート 2缶	1,760円
	ハケ 3本	1,500円
	軍手 30組	2,340円
	ノミ	1,080円
	ドアノブ	980円
	チョウツガイ	400円
	トタン	480円
	釘 接着剤	2,076円
9/17	バボナ (防虫剤)	1,009円
	コピー代	2,000円
	交通費 (バス代, ガソリン代)	15,045円
	その他	3,580円
	計	142,961円

□残金 126,124円

バックナンバーご希望の方は、はさみ込みのハガキに号数と冊数を明記してお申込みください。



創刊号	特集—キノコの王国	第13号	特集—里山を楽しむ
第2号	特集—野鳥の王国	第14号	特集—街を歩く
第3号	特集—恐竜の王国	第15号	特集—奥山に親しむ
第4号	特集—渚の王国	第16号	特集—海に潜る
第5号	特集—温泉王国	第17号	特集—田園に学ぶ
第6号	特集—けもの王国	第18号	特集—潟湖を巡る
第7号	特集—山菜の王国	第19号	特集—土といきる
第8号	特集—白山王国	第20号	特集—水のながれ
第9号	特集—薬草王国	第21号	特集—風のように
第10号	特集—鯨の王国	第22号	特集—雪に舞う
第11号	特集—島を探索	第23号	特集—彩
第12号	特集—川と遊ぶ	第24号	特集—涼
		第25号	特集—音
		第26号	特集—光
		第27号	特集—医王山
		第28号	特集—九十九湾

「自然人」のご紹介

読み辛いことと存じますが、p32-38は後ろのp38から読むようにして下さい。
自然人第29号の記事の転載です。一応、お断り済ですが、7ページも転載しましたので読読数アップに協力しておこうと思います。

この本は、県自然保護課が監修にあたり、石川の自然の紹介を行い、その保護と活用を啓蒙する季刊誌です。ネイチャーインフォメーションのイラストを毎月担当している21期竹中 敏氏をはじめ、どこかにワンゲルOBが登場しています。温泉王国特集の第5号には、結成前の「グループ薙」達のハダカまで（気色悪い？では、某美人姉妹のハダカも）載っていました。

中では、第8号白山王国、第27号医王山が好評だったようです。その医王山特集には、医王の里、福光側のイオックス・アローザスキー場はじめ、最新の医王山の情報が載っていますので、白山・犀奥の次に医王山が懐かしい方は是非ご購読下さい。（リフト終点の夕霧峠では只今、二階建の休憩舎を建設中）

また、自然人「掲示板」のページには、県内で行われる自然に親しむ行事の情報も満載されています。いきなり山は億劫だという方、まずは家族で楽しめることから...といった方には手頃な楽しい自然満喫コースがいくつも紹介されていて利用価値があります。

そのうえ、We Love Shizenjin のコーナーにお便りを出すと、テレフォンカードがもらえて、元がとれてしまうといった何とも嬉しい本なのです！

'94 10月 秋期号 1994年10月1日発行

定価 600円

企画 石川県自然史協会

監修 石川県環境部自然保護課

編集 『自然人』編集委員会

矢島孝昭（代表）

大村明雄 上田哲行

発行人 橋本勝郎

発行・編集制作

株式会社橋本隆文堂

企画出版版©

印刷 株式会社橋本隆文堂

『自然人編集室』

〒921 金沢市増泉4-10-10

株式会社橋本隆文堂企画出版室内

TEL0762-42-6121 FAX0762-43-7945

●講読のお申込みは、書店および編集室で承っております。

●本誌掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。

前号（自然人No28）の「九十九湾と縄文真跡遺跡」の18ページ2段目の「正保九年（一九八七）」は「天保九年（一八三八）」の誤りでした。皆様にご迷惑をおかけしましたことをお詫言し、訂正させていただきます。

植えて育てています。一般の方にも参加してもらって、苗のまわりの下草を刈り払ったあとです。うっとうしい梅雨の季節ですが、水溜りの上の枝にモリアオガエルの卵塊が見つかり、谷川からカジカガエルの鳴き声が、また森からはアカシヨウビンの声が聞こえてきます。夜になると、他では聞けないコノハズクの声もよく聞くことができます。

七月下旬、梅雨が開けると、それまでほとんど姿を見せなかったニホンザルが、野猿広場に毎日ように出てくるようになります。川の冷たい水に入ってカジカやイワナを探したり、水中の石を拾ってカゲロウやカワゲラの幼虫を見つけるのも楽しいでしょう。

秋

蛇谷の秋は早く、八月中旬にはススキが穂を出し、ギリギリスやコオロギ類が盛んに鳴いています。九月になり、オニグルミやアケビ、クリなどが実ると、それを求めて動物たちが集まってきました。カジヤ谷やジライ谷、野営場などは、一面オニグルミの林となっていて、実を運んでいるリスに出会うことも可能です。夏の花が残っていたり、秋の花が咲き出すなど、九月は花の種類が多い時期でもあります。よく目につく花の時期を図にしたので参考にしてください。

十月上旬にスーパール林道の一帯標高の高いところで始まった紅葉が、中宮展示館まで降りて来るのは十月の終わりです。赤や黄にきれいに色づいた落ち葉を探しながら歩道を歩くと、シジュウカラやヒガラ、コガラなどの混群に出会えるでしょう。

中宮展示館周辺の花ごよみ

種名	時期	5月			6月			7月			8月			9月			10月		
		上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
カタクリ		○																	
ミヤマキリシタン		○	○	○															
ヤマブキ		○	○	○															
ニリンソウ		○	○	○															
タニウツギ			○	○															
ヒメウツギ			○	○															
ヤマボウシ				○	○	○		○	○	○									
ミツバハコドリ					○	○		○	○	○									
オカトラノオ							○	○	○	○									
ヤマアジサイ							○	○	○	○									
クガイソウ							○	○	○	○									
オオバギボウシ							○	○	○	○									
オトギリソウ							○	○	○	○									
クサボタン							○	○	○	○									
コウゾリナ								○	○	○									
キンミズヒキ								○	○	○									
クズ								○	○	○									
ツユクサ								○	○	○									
ハンゴンソウ								○	○	○									
クサギ								○	○	○									
マルバハギ								○	○	○									
オトコエシ								○	○	○									
ツリフネソウ								○	○	○									
ゲンノシヨウコ								○	○	○									
アキノノゲシ								○	○	○									
ハクサンアザミ								○	○	○									
ノコンギク								○	○	○									
イワギク								○	○	○									
ゴマナ								○	○	○									
オオアキギリ								○	○	○									

ブナ植栽地下草刈り体験会に参加して

平成六年六月二十六日(日)、石川県白山自然保護センター主催による、白山ブナ植栽地の下草刈り体験会が行われました。

この日の参加者は一般市民二十数名。白山自然保護センターの米山所長から、事業説明を受けた後、センター裏手にあるブナ植栽地へと向かいました。参加者たちは、五人一組となって、ブナと区別がつかないくらい生い茂った草を刈っていきます。このブナたちは、平成二年に植栽されたもので、まだ一層くらい。四年の月日をかけてやっとここまで育ったブナも、下草を刈らないと、草の影になって日光があたり枯れてしまったり、ツル草にからまれて奇形のブナになってしまったりするそうです。ブナに対してのおのずと湧いてくる愛情と使命感にかられて、その場にしゃがみこみ、丹念にツル草をとっている参加者の姿も見られました。

「人間は今日まで、営利目的で木材になるスギなどの針葉樹を植え、本来そこに生息するブナなどの広葉樹をなくして、一帯を針葉樹林にしてみました。そうするとその一帯に生息するのは、針葉樹林に住む生物だけに限られてしまいます。そういった環境の単一化を防ぐための第一歩として、ブナの植栽がなされたのです。」そんな米山所長の言葉を噛みしめながら、自然を慈しみ育むことの大切さを肌で感じる事ができた一日でした。

(A)

中宮展示館周辺の自然観察

上馬康生

石川県白山自然保護センター



蛇谷自然観察園のかじや谷広場

中宮展示館へ行くときは、時間の余裕を持って出かけ、ぜひ周辺の自然観察をしましょう。展示館の裏山に設けられた蛇谷自然観察園の歩道を歩いて野猿広場を訪ねたり、展示館前の休憩園地や川のなかで遊んだり、クルミ林のなかの中宮温泉

野営場でキャンプをするなど、自然を存分に楽しむことができます。ここでは、春から秋にかけての自然観察のポイントをいくつか紹介します。

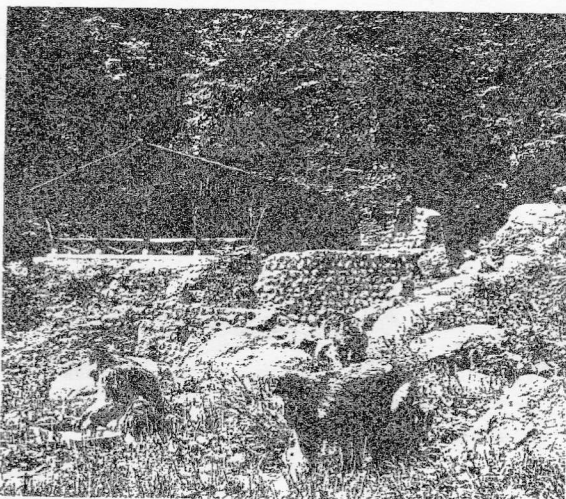
春

深い雪に閉じ込められるため、中宮展示館までの車道が開くのは毎年四月の終わりです。そのころから五月上旬にかけてが、周辺の山の本々が芽吹き始めるころで、ブナの鮮やかな黄緑をはじめとして様々な色合いを見せてくれます。裏山の歩道を行くと、明るい日差しの中にかたくりやキクザキイチリンソウが群生しており、ウグイスやホオジロ、オオルリが方々でさえずっています。

夏や秋には草木に隠れて見えないニホンカモシカも、このころなら見つけることができます。五月中旬になるとヤマブキやタニウツギが彩りを添え、草原にはウスバシロチョウがよく舞っています。

夏

六月になると森は濃い緑に覆われ、蛇谷自然観



野猿広場。サルに会うなら夏休みがベスト

察園の歩道のまわりの草も伸び、目立つ花も少なくなります。そんな中を歩いていると、ところどころ、林の下草が一面に刈り払われていることに気がつくでしょう。もともとブナ林であったところで、それを復元しようと数年前からブナの苗を



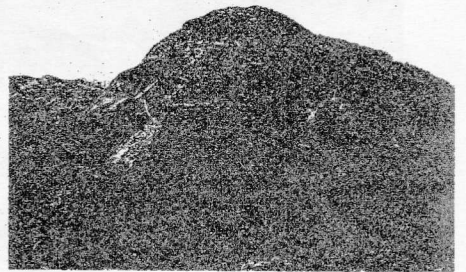


純天然の露天風呂

が、ここはあわてずゆつくり登ります。一帯は、七月初からニッコウキスゲ、イワショウブ、キンコウカ、カライトソウなどが咲く草地です。やがて、ヒノキやコメツガの生える県境尾根を歩くように

ここより、しばらく平らな道が続きます。妙法山が近くに見えてきますが、一度下つて、登り返さなければなりません。細くて急な岩がちの道を二十分ほどで「七七五」の妙法山に着きます。山頂は狭く、展望は抜群。中でも白山は、三方岩岳から望むのよりうんと近く、迫力があります。また、笈ヶ岳の姿もよい。

の噴泉塔群を訪ねるもので、ベストシーズンは十月中旬からの紅葉の頃。ファミリーハイキングにもおすめのコースです。

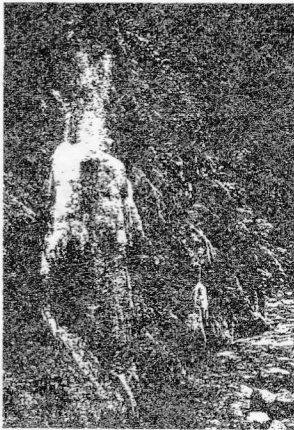


妙法山

なります。樹木の丈が低くなると、三方岩岳の加賀岩ピークに達します。ベンチがあり、眺望は良い。このあたりの紅葉は、九月下旬から十月中旬にかけてが見ごろ。うまくゆけば綾錦の山々を前景に、新雪をいただいた白山や北アルプス連峰が青空に浮かぶという豪華版を見ることができま

しかし、妙法山まで足を伸ばすのなら、のんびりしてはいられません。三方岩岳の飛騨岩からいったん下り、馬狩^{うまがり}荘^{しょう}司^し山を経て、馬狩へ下る鶴平新道を左に分けると、まもなく野谷荘司山です。山頂一帯の岐阜県側は、赤茶けた山肌をさらしています。

紅葉の木々の間を抜けていくと、もうせん平に着きます。オオシラビソなどの林に囲まれた小さな湿地で、名のおり食虫植物のモウセンゴケが多い。夏にはニッコウキスゲやコバイケイソウも咲いてにぎやかですが、秋は静寂そのものです。



岩間の噴泉塔

岩間噴泉塔歩道

新岩間温泉 1:00 → 岩間温泉湯 0:40 → 噴泉塔 1:00
群 このコースは、国指定の特別天然記念物「岩間

の噴泉塔群を訪ねるもので、ベストシーズンは十月中旬からの紅葉の頃。ファミリーハイキングにもおすめのコースです。

新岩間温泉（山崎旅館）から少し道なりに行くと、右に丸石谷林道が分かれるところで柵がしてあり、車はここまで。周辺に三、四台の駐車は可能ですが、いっぱいの場合は旅館から少し下った、休憩舎のあるところに止めよう。

車道を一時間くらいで元湯に着きます。新岩間および一里野温泉の泉源で、野趣溢れる露天風呂（無料）もありますが、これは後のお楽しみ。ここから山道となり、右に岩間道の登り口を見ます。ブナ林の中の快適な道は、やがて急な下りとなつて、噴泉塔群のある中ノ川に降り立ちます。温泉中の石灰分などが沈着してできる噴泉塔は、一年に数十センチ成長するものもあり、川に沿っていくつか点在しています。

帰りの登りはちよつとキツイが、先ほどの元湯か旅館の露天風呂（有料）で、色づいた山を見ながら汗を流すのもなかなかいい秋山の楽しみ方ではあります。

(T)

できるでしょう。ここから五分ほど行くと林が途切れ、丸石谷の奥に白山の山頂部が望めるので、ぜひそこまで足を延ばしましょう。帰りは同じ道を下るか、またはあと約十五分先へ進んだところの「しかり場分岐」から、一里野温泉スキー場の山頂へ下る道に行くかのどちらかです。(U)

中宮道

中宮温泉 2:00・中宮道標高一二一〇m地点 1:30

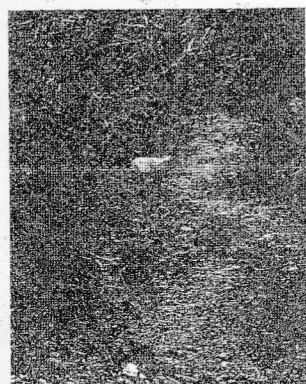
クロユリやハクサンコザクラなど高山植物の大群落。昔、白山が活発に噴火活動をしていたことを示す噴出物や火山地形。ダケカンバやブナの大木がしげる原生林と、そこに生きる多くの野生生物。中宮道は、数ある白山の登山道の中でも特に豊かな自然にふれることのできる道です。しかし、中宮温泉から室堂まで二十mと距離があるため、上りも下りも途中にある避難小屋に泊まる山行となり、利用者は限られています。そこで、日帰りで行けるコースをこ

こでは紹介します。

中宮温泉の駐車場に車を置き、橋を渡り、旅館の川向いに付けられた車道を上って行くと、左に大きくカーブしてまもなく、谷が狭まったところに橋が架かっています(標高七三〇m)。この湯



中宮道の尾根と白山山頂を望む



登山道に出てきたカモシカ

谷を渡つたところからが登山道の始まりで、最初はコンクリートの階段や急斜面

のまつすぐな上りが続きます。周りを観察する余裕はないかもしれませんが、この付近はカモシカがよく見られるところで、注意深く観察すると道沿いに食痕が見つかったり、カモシカ道が登山道と交差しているのが分かるでしょう。上りきると林が途切れ、高茎草原が広がっています。五月の前半ならカタクリやキクザキイチリンソウなどが咲き、芽吹き始めた若草を求めて、ニホンザルやニホンカモシカなどが現れるところです。しかし、夏は、ススキやイタドリ、ハクサンアザミなど、背丈をはるかに超える高さの草で被われます。その草原が終わったところにトチノキがあり(標高九三〇m)、再び林の中の道となります。

標高一〇〇〇mを超えると、ブナを主とした大木の林となります。ヒガラやコガラ、ゴジュウカラなどに出会え、六、七月ならエゾハルゼミ、八月ならコエゾゼミがよく鳴いています。また登山道にはテンやニホンザルなどの糞が多いところでもあります。そして秋には紅葉が素晴らしく、倒木にナメコやブナハリタケが見つかるでしょう。急であつた道も、標高一一五〇m付近から緩やかになり、まもなく中宮温泉から二・二kmの表示の

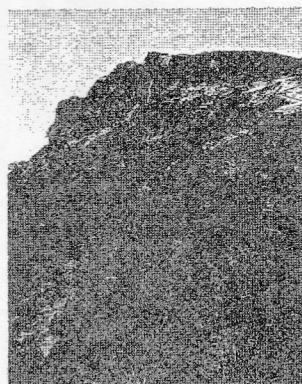
ある「清浄坂」の道標があります。そこから尾根筋の道を十五分ほど進むと、見晴らしのよい小ピークに着きます(標高一二一〇m)。中宮温泉から約二時間で上がって来れるでしょう。両側が切り立っているので足元に注意しながら四方を眺めると、東方に湯谷頭、南方に中宮道上部の尾根から白山山頂部、北には冬瓜山や笈ヶ岳などを望むことができます。(U)

三方岩岳・妙法山

三方岩岳 0:50・三方岩岳 4:00・妙法山 4:30

三方岩岳は標高一七三六m。これだけの標高を持つ山へ、一時間もかからず登ることができるのは、石川県ではここだけです。それというのも、登り口の標高がすでに一四五〇mもあるからで、いい悪いはさておき、スーパー林道のおかげというわけです。

その登り口は、石川・岐阜県境の三方岩トンネル岐阜側にある三方岩駐車場で、トイレ、水もあります。この先、水はないので、つめ忘れないようにしましょう。いきなり階段の登りが続きます



瓢箪山からの三方岩岳

ハイキングコースガイド

(U) 上馬康生
(T) 梅 典雅

石川県白山自然保護センター
石川県環境部環境政策課

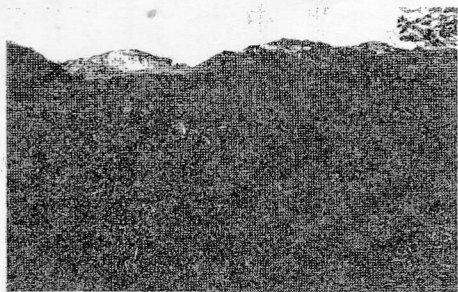
日帰りでも楽しめる
自然観察にも適したコースを紹介



加賀禪定道

ハライ谷登山口 2:40 → 樽新宮 2:20 → しかり場
分岐点 2:00 → 一里野温泉スキー場山頂 2:30

この道は、平安時代に開かれたとされる歴史のある道で、昔は修験道のために使われていました。加賀の国の白山宮（現在の鶴来町の白山比咩神社）から白山山頂へと続いていた道の一部で、



丸石谷の奥に白山山頂部が望まれる

昭和の初めに廃道になってしまったものが、昭和六十二年に登山道として復活したものです。起点となる一里野温泉から室堂までの距離が、十八。余りと長いので、おもに白山からの下山路として一部の人に利用されているだけです。



大木に囲まれた樽新宮

一里野から白山スパー林道の方へ車道を上って行くと、上りきったところで道が二つに分かれています。ここから岩間温泉への車道に入り、しばらくしてハライ谷にかかる橋を渡ると、加賀禪定道全体の案内板と登山口の標識があります。コナラやミズナラ林の中の急な上りの続く登山道沿いは、五月前半にはカタクリがびっしりと咲いており、秋になるとクリやオニグルミの実が落ちています。

かし、四塚山、加賀室跡、百四丈滝など歴史的な場所のみならず、高山植物の大群落や北部白山の山々の展望など、見所の多い道です。ここでは、一里野からの日帰りでも楽しめるコースを紹介しましょう。

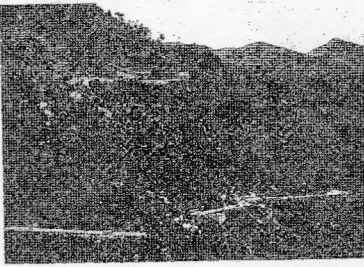
びるミズナラが目立ち、実際、地面を掘り下げて石で囲った炭焼き釜の跡も見つかります。標高一〇〇〇付近で道は緩やかになり、右に大きくカーブしてスキの植林地の中の階段の上りとなります。標高一二五〇を超えたあたりからはブナ林となり、大木の林がこれから先、標高一五〇〇まで続いています。春から夏にかけてはコルリやヒガラ、キビタキなどがたくさんさえずっており、地面にニホンカモシカの足跡や、ブナの木肌にクマの爪痕がみられます。また振り返ると、ブナの木々の間から笈ヶ岳や大笠山が望めます。傾斜のきつくなった道を一步一步進んでいくと、「にちようとぎ」と書かれた道標があります。ここからまもなく樽新宮に着きますが、右側に下っている道を行くと、「御仏供水」と名付けられた冷たい水が流れているので補給しておきましょう。

樽新宮は、ヒノキやコメツガ、ダケカンバなどの大木に囲まれた林の中に小さな社が立っているだけです。昔の修験道の時代には、付近にたくさんある建物があったといわれています。ハライ谷の登山口から樽新宮までは三時間弱で来ることが

険しい地形と豊かな動植物

白山スーパー林道を通ると分かりますが、非常に急な斜面を削って車道が付けられています。そこは蛇谷と呼ばれる谷で、土地の隆起と長い間の河川の流水や雪崩などによる浸食で、V字谷といわれる険しい地形となっているところです。方々にみられる新しい崩壊跡が、今も盛んに浸食活動を続けていることを教えてくれます。中ノ川や丸石谷など北部白山の他の谷についても同様で、この地域は白山のなかでも特に地形の険しいところと言えます。今から二十年ほど前までは、一部の場所を除いては、ほとんど人の立ち入ることができない場所だったのです。

そのおかげで、北部白山には自然のままの森林がまだ多く残っています。なかでも標高一六〇〇メートル付近までの、尾根や比較的緩やかな場所はブナ林となっており、特に雄谷上流や蛇谷上流、中宮道周辺などは、広範囲にわたって良好な林が残っています。またこの地域の地形の険しさと積雪の多さから、急斜面には高木が育たずに高

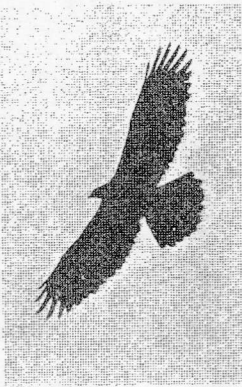


茅草原や低木林となっている場所が多いのも特徴です。これら豊かな植生があり、人が入り込みにくい地形であったことから、北部白山には動物もたくさんすんでおり、特にニホンカモシカやニホンザル、ツキノワグマな

ど大型は乳類の生息密度が高い地域となっています。ニホンカモシカは多いところでは一畝四方に十二〜十八頭も見つかり、ニホンザルは白山の群れのほとんどがこの地域にいます。また山の鳥のなかでは最大で、その生態系の頂点に位置するイヌワシも、この地域全域にすんでおり、約五つがい大きな谷ことになわばりを構えています。

保護区の指定

北部白山地域は、白山のなかでも特に優れた自然を有していることから、その自然の維持のためにさまざまな保護区の網がかぶられています。全域が白山国立公園から白山一里野県立自然公園となっており、そのなかでも特に厳重に景観の維持を図る必要がある地区で、物を作ることや伐採、採集などが厳しく規制されている特別保護地区や、これに準ずる第一種特別地域が広範囲にわたっています。登山道でいえば、加賀禅定道の奥長倉山以南、岩間道の岩間元湯付近より南、中宮道のシナノキ平避難小屋付近より南、北縦走路のある県境の尾根沿い一帯などが特別保護地区となっています。またほぼ全域が指定されているものに、ユネスコの生物圏保存地域、国設鳥獣保護区、白山カモシカ保護地域があり、その他に白山



森林生態系保護地域や、自然保護のための県有地である中宮景観地などがある

ります。

ところで、いろいろな保護区に指定されているから、この地域の自然の保護には問題がないかという、必ずしも安心しておれないこともありま

す。たとえば国立公園であっても、良好なブナ林が残っているところの大部分は、伐採に関してほとんど規制のない第三種特別地域であり、また砂防や治山目的で車道が谷の奥へ延びたり、ダムがつくられたりしているのです。

自然を楽しむ

豊かな自然の広がる北部白山は、昔は中宮温泉や岩間温泉などの湯治客や、岩間道、中宮道などを歩く登山者など一部の利用者を除くと、ほとんど訪れる人のない秘境といわれたところでした。しかしここ二十年ほどの間に、白山スーパー林道の建設や一里野の各種の開発、白山自然保護センター中宮展示館やブナオ山観察舎の建設などで、急速に利用者が増えてきました。夏から秋はドライブに冬はスキーに、たくさんの人々が訪れています。また車道だけでなく、それに続く歩道も整備されたおかげで、三方岩岳や親谷の湯など白山スーパー林道沿線や、岩間の噴泉塔、加賀禅定道などの自然をゆっくり楽しむこともできるようになりました。

せっかくの素晴らしい自然も、車で通過するだけでは十分に味わうことはできません。車を止めて少し歩いてみたり、登山道を半日かけて往復したりすることによって始めて、本物の自然に接することができるでしょう。この特集が、北部白山の自然を楽しむための一助になれば幸いです。



特 集

北部白山

上馬康生

石川県白山自然保護センター

白山の大汝峰より望む北部白山

はじめに

「北部白山」といっても、一般に広く通用する言葉ではないと思うので、はじめにその言葉の説明をしておかなくてはなりません。

白山の優れた自然の保護と適正な利用のための指針として、環境庁が作成した白山国立公園管理計画書というものがあります。そのなかで、国立公園内を自然条件及び利用形態から中部、南部、北部の三つの地域に分け、北部白山地域として、「白山林道を主に利用され、野生動物の生息密度が高く、自然性の豊かな山地を有する地域」とされています。具体的には、国立公園内の吉野谷村、富山県上平村および岐阜県白川村の三方崩山以北の地域となっています。しかし、これはあくまでも行政区分であり、単純にそれだけで山の自然を区分できるものではありません。

ここでは、前記の範囲に尾口村も含め、白山スーパールンド（白山林道）を中心として、南は白山の大汝峰、北は大笠山付近までの範囲の、白山国立公園とその周辺地域を北部白山とすることになります。

医王山で遭難か

の
会社役員
金 沢

林道入り口
に社有車

県警へリも捜索

二十四日午後十時、金沢市十間町一〇、会社役員達磨さん(四〇)が「医王山へ」と言ったまま戻らない」と家族が金沢中署に届け出た。同署は達磨さんが遭難した可能性が高いとみて、二十五日早朝から同署員や地元消防団員ら約五十人と警察犬が出て現場付近を捜索しているほか、県警へリ「いぬわし」も空からの捜索を行っている。

達磨さんは白のＴシャツに青と赤の縞のジャージ姿で、青色スウェーデンの帽子をかぶっており、青色のリネックスを身につけているという。達磨さんは二十四日午前九時ごろに同社の社有車で自宅を出発したが、同日午後九時ごろになっても帰宅しなかった。妻が医王山付近を捜索した結果、この社有車が同市表町の林道入り口付近の駐車場(標高五百〇〇)で発見された。達磨さんは登山の経験はなく、一カ月くらい前から家族に「白山へ登りたい」と話しており、手始めに医王山の登山を思っていたらしい。

医王山で不明の男性保護

「医王山へ行く」と二十四日朝に自宅を出たまま行方分からなくなっていた金沢市十間町、会社役員達磨さん(四〇)は二十五日、高岩(とんびい)下の三蛇が滝付近(標高約七五〇)で下山途中のところを登山者に発見され、無事保護された。達磨さんは同腕などに怪しいが、達磨中署の調べでは、達磨さんは二十四日午後、

道に迷ったらしいと、下でじっとしていたと話しており、比較的元気だという。達磨さんが保護された場所は、二十四日夜に達磨さんの会社所有の車が発見された林道入り口駐車場(標高約五〇〇)から約七〇〇メートル離れたところだ。



「夕刊に載っている遭難者の達磨さんは、19期達磨 知香さんの旦那さんのことではないだろうか？」

との情報が事務局に入ってきたのは、25日夜のことでした。

遭難対策については何ら話も煮詰まっておらず、現役は夏合宿中とあって、ただ狼狽するのみでしたが、とりあえず達磨さんと同期の堀氏に連絡をいれてみました。

すでに堀氏には遭難の件は伝わっており、彼のまず中署へ連絡して現況把握を、の処置により、もう無事救助されていることがわかりました。<どうしたらいいのだろう>の事務局長のパニックも短時間で消沈することになりました。

遭難対策―現役のサポートとといえば、第一に予想されることながら、山離れしているOBにそのうえ救助なんて…と、結局話は進まず…。さしあたりの合意は、OB会そのものが確立してから。避けるわけではないが、時間をかけて話し合っていこうのあたりでした。

今度の事件では、「遭難は当然、山の現役である現役側におこること」といった私達の認識の盲点をつかれました。むしろ組織から離れ、山の姿に気付かず、昔のままの判断をひきずっているOB側に、遭難の可能性は高いともいえるのです。

そして、遭難の報で私にパッと浮かんだのはやはり現役でした。彼等には組織があり、山の現役であり、捜索活動に加わってもらう可能性はずっと高いのです。では誰が発令するのか、誰が要請したことへの責任をとるのかなどといわれると困ってしまいますが、お互いに誠意を出しあえる関係でありたいと願うばかりです。

上記のような意図がありまして、達磨さんに

原稿をお願いしました。ある種の忘れたい気持ちや整理のつかないお気持ちもあったようですが、しつこくお願い（で、最後のページにまわってしまった）して、書いていただきました。

無事救助をお喜びするとともに、夏には指導員つきの白山登山の企画がいくつもあることであり、是非「子供達と白山に登りたい」初志を貫徹されて、山の素晴らしさの方を味わい直されていただきたく思います。

夫の遺愛箱

19期 達磨 知香

「やっぱり、おかしい！」

で、この出来事が始まりました。それは、8月24日の夜のことでした。夫が

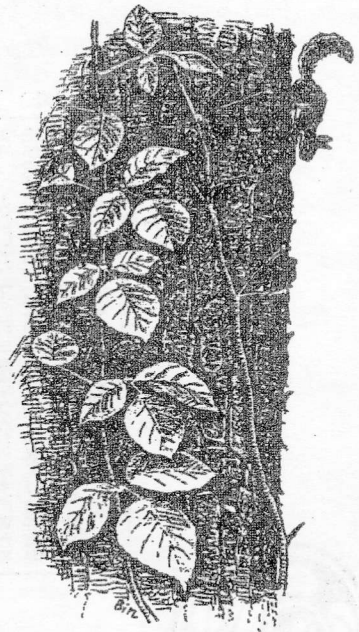
「医王山へ行ってくる」

と言って、朝9時にでかけたまま帰ってこなかったのです。

いつもは日曜日になると家族揃って出掛けるのですが、この日は私の勤務先の小学校でバーベキュー大会があり、子供達も連れて行くということで、主人一人が暇になりました。主人は常々「白山へ子供達と登ってみたい」と言っていました。何しろ京都生まれの京都市育ち。自分も登れるか自信がなく、まず医王山に登ってみようと考えていたのです。それで、一人で家にいるよりは、天気もいいことだと、でかけることにしたのです。私は医王山ぐらい、地図なしでも軽々と歩けると思っていたので、「行ってくれば？」

と言っただけでした。ワングル時代に学んだことを、すっかり忘れてしまっていたのです。あの時もっと詳しく調べたり、教えてあげればこんな事にはならなかったと、何度悔いたかわかりません。初めての山へ一人で入る恐ろしさを全く気付かずに行ったのです。

夕方6時になっても帰って来ず、ちょっと遅いなあと思いました。が、主人は疲れるとどこ



「ツタのからまる木で」イラスト：竹中 敬

自然人29号より

でも昼寝をしてしまうので、車の中で寝ているのでは…とも思いました。その頃は7時頃までまだ明るかったので、＜寝ぼすけめ！＞なんて楽天的に考え、暗くなると危ないのになと、やや気掛かりな程度でした。

8時を過ぎて、さすがにもう真っ暗。遅いなあ。早く帰ってくればいいのに…。

8時半を過ぎると、いくらのおんぴり屋の私でもさすがに「やっぱりおかしい！」「何かあったかも」と心配になり、見に行くことにしました。＜もし車の中にいなかったらどうしよう＞と不安ながらも、子供達を祖母に頼み、でかけました。

途中本当に不安でした。アクセルを踏んでもなかなかスピードがあがらず、どうして速く進まないのかとあせる一方で、何かがおきていたらどうしようと確かめたくないような気持ちもありました。

見上峠にやっと着きました。その辺りに車はありませんでした。何かホッとした気持ちになり、さらにキャンプ場（医王の里）まで上がってみました。辺りは暗く、静かです。卒業以来

来たことがなかったので、こんな所あったかなあ？変わったみたいだなあと思いながらも、車が見つからないということは、もう下山しているということだといいい方に解釈し、ちょっと安心し、ひと周りして帰ることにしました。

ところが、見上峠まで戻り、バス停近くのちょっとした道の所で念のためと、曲がってみると、何と主人が乗っていった車がボツンとあったのです。ええっ！どうしてあるの！？主人がこの真っ暗な山の中に一人であることを否定したい気持ちで一杯になりながら、急いで覗きこみました。いないのです。鍵のかかったままの車をガラス越しにのぞいても――やっぱりまだ山の中にいるんだ！否定したくて、何度覗き直しても、やっぱりいません。「バパー」と叫んでみても何の応答もありません。

「どうしよう――」思いついたのは、とりあえず家に電話することでした。電話のある所まで少し下りて、家に電話しました。

「いないよ。どうしよう……」

というのが精一杯でした。

「まあ、とにかく帰ってこい。」

という父の言葉にうなづきながら

「もう一回確かめてきてから帰る。」

とやっと返事をして、また見上峠まで戻りました。さっきと同じでした。しーんと静まりかえった中に車が一台ボツンとあるだけでした。やっぱり山の中なんだ――動かぬ事実がやっと納得できた気になりました。

家に戻ると、親しくしている近所の人がかけてつけていました。「どうだった？」と聞かれて、思わず泣いてしまいました。それでも家の中に入ると＜私がしっかりしなくちゃ＞と緊張感がみなぎってきて、＜私が探さなければ＞の覚悟もできました。でも一人では不安なので、主人の義兄と近所の人と、三人で行くことに相談しました。その時はまだ、自分達だけで探そうと思っていました。



しかし、母は
「一応、派出所に届けておいたら？」

と言って、でかけていきました。戻るまでの間に、私は子供達に

「パパが山へ行ったきり帰ってこない」ことと、
「パパを探しにママがでかけている間、おばあちゃんの言うことをよくきいてね」

をくり返しってきかせ、寝かせました。一番上が小三、下が二才という子供四人なので、心配でしたが、そんなことはいってられません。＜とにかく探しに行かなければ＞という緊張感で張り詰めていました。

なかなか母が帰ってこないなと思っていたとその母から電話がかかってきました。

「いろいろ聞かれるので、派出所まで来るように」

ということでした。すぐ行くと

「どうして一人でいったのか」

を、とにかくしつこく聞かれました。どうしてなのか初めはよく分かりませんでした。自殺を疑っているのだとようやく分かり、

「そんなことはないと思います」

と答えていました。

「とにかく、私達で探しますので」

というと

「こういうケースは初めてなので、中署に連絡してみます」

そうして、私が中署へ出向かねばならないことになり、近所の人と中署へ行きました。そこでも自殺の疑いはないかと何度もきかれました。

署の人に

「捜索隊を出さないといけない」

「警察犬を頼みなさい」

「猟友会の人を二人程お願いして、出てもらってください」

とされました。

＜あの――そんな大袈裟にしないで――＞と、医王山ぐらいて遭難騒ぎなんて、ちょっと恥ずかしいという気持ちが、その時までは、正直いってありました。けれども、もうそんな恥ずかし

がってなんかいられない、警察の言われる通りになくては、と思ひ直しました。

深夜の11時に、警察の方と見上峠で待ち合わせ、主人の乗ってきた車を教えました。何か手掛りはないかと覗きますが、何もありません。警察の方が車で一回りをされ、私達の方は中署に戻り、次の日の打ち合わせをしました。

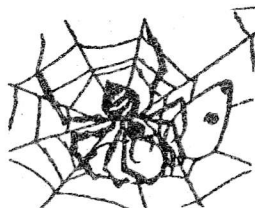
警察犬と医王山の消防団へは警察から、猟友会へは翌早朝父から連絡をいれてもらい、5時集合となりました。朝の弁当のお握りを作ったり飲物を用意したりすると、もう夜中の3時になっていました。

4時には家を出なくてはならないので、30分だけでもと部屋へ休みに行きました。いつもならぐっすり眠っている長男がむくっと起きて「見つかった？」

と小さな声で聞きます。その言葉に涙がこぼれました。

「朝になったらまた探しにいくから、心配しなくてもいいよ。」

と言って、寝かせました。



すぐ時間になり、見上峠に4時半に着きました。約束の5時になっても警察がなかなか来ず、イライラしました。やっと来て、まず車で林道沿いに見てまわることになりました。

車でどんどん登れるようになっていたのにはびっくりしました。朝日がとてもまぶしかったのが今でも思い出されます。大学時代の医王山とはすっかり変わっていました。もっと下調べをして送り出せばよかったと、またも後悔がこみあげてきました。

それから少し山道に入ってみました。藨岩の方が気になりましたが、警察犬の邪魔になってはいけなないので、一旦集合場所へ戻りました。こんな時だけど、久しぶりの山道をとても懐かしく思いました。この頃にはもう居直ったように落ち着いてしまいくっきりしなくてはと

ばかり思っていました。

警察犬、消防団、猟友会、警察が集まるのに時間がかかりました。早く探しに行きたい気持ちを押さえながら

「ありがとうございます。」

「ご迷惑をかけてすみません。よろしくお願いします。」

と一人一人に挨拶してまわりました。町内の消防団の方々にも来ていただき、申し訳なく感謝していました。そうしているうちにやっと捜索が開始されました。ふと、同期の梅君にお願いしようかなと思いましたが、まあすぐみつかるだろうし、こんなに大勢の方がおられるのだからと、打ち消しました。

私は警察犬の後ろを歩きました。他の方は4方面ぐらいに分かれて（確かではなく、ぼうっと聞いていた）探しに行きました。警察犬が何度も行ったり来たりをするのには閉口しました。それでも白元の山頂に着き、ホッとすると、主人もここまでは登ったのかなと思いました。手掛りもなく下りることになりました。その時、右手のブッシュの中に藨岩の方向を示す標識がありました。私はそちらが気になりましたが、「ブッシュがひどいから元の道に戻りなさい」という指示にうなずくしかありませんでした。その時は気が張っていたせいか自分でもびっくりするくらい足が前に出て、歩けました。人間って気持ち一つで頑張れるものだなと感心したりもしました。

下りてからまた林道沿いに車で回りました。いっこうに何の手掛りもありません。

お昼近くになっても何の連絡もなし。＜捜索隊の方々の昼食を用意しなくては＞と、気を回しながらも、＜どうして見つからないのだろう＞と不安が大きくなり始めていました。

とにかく暑い日で、みなさん汗だくでした。私も昨日来の睡眠不足と暑さで、だんだん疲れてきました。

屋からも車で林道を走りました。＜捜索隊の

方々が頑張って探し続けて下さっているのだから大丈夫。私はとにかくしっかりしていなくてはと自分を励ましながらも、なかなか情報が入りません。くもしかして…>がふっと浮かんできては、くいや、絶対見つかる>と信じようと思いました。

天候が急変し、雨が降り始めました。車の中でついうとうとしてしまいました。何か外が騒がしい…くもしかして>と外へ出てみると、「見つかった」という情報が入ってきたのでした。探していただいた方々への感謝で一杯になってしまいました。

こうして、夫の遭難は無事救助で終わりました。

夫に「どこで迷ったのか」と聞くと…
白元の山頂まではふうふう言いながら登り、帰る時、もう疲れたので林道に下りて歩こうと思った。地図を見て、上りと違う道を選んだのが間違いだった。結局沢を下りることになり、どんどん下って滝（編者注：白姫滝か？登山道は途中から沢を離れ、左岸岩壁につけられている箇所です。通常ここまで沢沿いには進めません。今年は異常渇水で流量が少なく、途中の分岐に気付かぬまま沢をたどってしまったようです）まで来てしまった。もうどうしようもなくなりそこでずっと立往生していた。一晚、滝の上の枝につかまり、助けに来てくれるのを待った。夜が明けても、前は滝、後ろは沢で登り返す力もなかった。ヘリコプターの音が聞こえ、その姿は見えなかったが、自分を探しに来てくれているのだなあと考えた。随分時間がたち、急に曇ってきた。雨が降って水の量が増えてきたらもう助からない。滝を下りようと決心し、死ぬ思いで下りた。この時にでた力は、今思い返すと不思議なくらいだった。滝を下りると道が開け、蘆岩の下の所に出て、やっとの思いで三蛇の滝の下の方まで下りた。座り込んでいると、

上の方で人の声が聞こえ、思わず「助けてくれえ」と叫び、救助された。

（上記中、地名は編者が補足しました。）

大勢の方々に一生懸命探していただき、本当に感謝すると共に、山の怖さにあらためて震える思いです。私自身は、あの時ああしていればと、反省でいっぱいです。

思えば大学時代、ワッゲルに入った私は、主人と同じ「素人」でした。そんな私が山に登っていたのは、先輩方の教えがあったからこそなんだと、20年近くも過ぎてから気付きました。

新聞などを通じて心配して下さった方々、本当にありがとうございました。

このわずか三日後に、江口さんの訃報を知られました。二学年下の彼女とは、お正月に一里野ヘスキーに行った時、久しぶりに会っていました。その時、主人も江口さんに会っており、訃報には驚いていました。

つい三日前には、私達家族の前にも「死」がたちはだかっており、そこから生還できたばかりでした。皆さんは馬鹿げた話と思われるかもしれませんが、

「あの滝を下りる時に出了不思議な力は、もしかしたら江口さんがくれたのかな」と、主人は言い、私もそんな気がしてしまいました。

彼女のお通夜の席ではそんな思いも重なり、なかなか立ち去りがたく、心からご冥福を祈らせていただきました。



《OB会費期別納入一覧表及び納入者名一覧表》

(1)OB会費期別納入一覧表

(平成 6年11月10日現在)

期別	対象 者数	振込 者数	振込金額	期別	対象 者数	振込 者数	振込金額
1期	1	1	10,000	21期	17	5	42,000
2期	1	0	0	22期	15	5	42,000
3期	17	12	122,000	23期	20	13	130,000
4期	7	3	30,000	24期	15	5	36,000
5期	15	4	34,000	25期	14	4	32,000
6期	11	5	42,000	26期	13	4	40,000
7期	19	4	40,000	27期	12	2	20,000
8期	18	5	55,000	28期	12	4	40,000
9期	20	10	100,000	29期	13	2	20,000
10期	12	4	40,000	30期	16	1	10,000
11期	19	9	84,000	31期	9	1	10,000
12期	12	4	40,000	32期	4	1	10,000
13期	11	8	80,000	33期	7	2	20,000
14期	11	2	20,000	34期	12	0	0
15期	18	13	135,000	35期	7	1	10,000
16期	14	9	82,000				
17期	12	5	50,000				
18期	15	9	82,000				
19期	12	5	50,000				
20期	18	5	44,000	合計	449	167	1,602,000

(注)夫婦会員は対象者数は1名としてあります。また、住所不明、
海外勤務、死亡の方は対象者数から除いてあります。

(2)OB会費納入者一覧表(敬称略)

(平成 6年11月10日現在)

期別	名 前	期別	名 前	期別	名 前	期別	名 前
1期	仙田 厚太郎	10期	白石 淑子	16期	中野 淳一	23期	辻 政孝
3期	池本 和彦		寺本 典生		英 俊彦		鳥越 伸博
	能松 伊勢子		山知 亮		山内 政司		名倉 均*
	岩井 修	11期	青柳 健二	17期	川村 高弘		広岡 謙一
	江竜 喜史		畔山 宏次		小島 敬*		村井 匠
	安藤 道子		石田 清久		杉本 義一	24期	岩坪 学
	亀井 重郎		加藤 忠好		藤井 芳治		角田 尚幸
	小林 宣泰		小山 清		渡辺 和文		神谷 明延
	佐々木 美穂子		芝田 真*	18期	井上 茂良		坪井 陽典
	鈴木 兵一		杉森 和義		佐藤 喜代美		広岡 悠子
	田村 昭夫		森川 功		津島 直也	25期	石本 一鶴
	登内 郁夫		山口 裕		堤 善明		金山 裕之
	西尾 皓史	12期	小西 外士郎		椿川 利弘		高橋 伸治
4期	鈴木 正國		近藤 正興		岡部 伸一		樋口 隆樹
	高田 昌嗣		西田 一秀		森 博彦	26期	嶋田 雅昭
	森島 稔		宮島 孝司		横井 恒雄		益川 珠美代
5期	稲葉 正己	13期	伊藤 純治		横山 功		定田 誠
	亀田 武		大島 良治	19期	石田 千絵		山口 雪枝
	川島 勇		柴田 茂樹*		佐野 吏	27期	大川 博子
	山田 允		橋正 徹		帯刀 圭子		藤原 謙治
6期	石橋 毅進		南 梅子		梶 典雅*	28期	小川 隆
	大崎 進		吉田 穂積		塗谷 光枝		土井 泰彦
	清野 邦弘		吉本 良治	20期	栃尾 俊治		浜本 信一
	合津 尚		神林 博		中村 元風		吉田 直子
	中川 皓三郎	14期	浅見 裕子		久富 象二	29期	渋谷 敏行
7期	飯田 利之		清家 雅幸		深田 進*		中道 正樹
	四十万 利之	15期	上馬 康生		横山 寿人	30期	野田 和裕
	中山 美津枝		宇野 潔*	21期	大沢 安一*	31期	水腰 英四郎*
	村田 泰恵		金井 澄		岡崎 秀二	32期	鮎川 剛
8期	穴田 昭一		坂尻 忠秀		加藤 万里子	33期	岡田 敏
	篠島 益夫		鈴木 良紀		滝本 民夫		奥出 俊一
	永谷 洋三		祖父江 直久		谷屋 明彦	35期	井村 俊夫
	松浦 昌孝		舟田 節子	22期	安達 敦子		
	山村 嘉一		増田 富雄		鎌田 一宏		以上 167名
9期	伊藤 博道		松縄 宏		黒崎 敏男		
	上島 嘉美		松林 知一		森 恵利子		どうも有難う
	清水 一		間所 新一		安井 聡		ございました
	白井 勇		三宅 毅	23期	石地 隆司		
	谷道 正晴		横井 昭次		小久保 光将		
	鍋島 武	16期	金森 広		興井 隆		
	服部 千章		川端 俊朗		窪川 淳一		
	平村 耕作		北川 隆次		小坂 陽克		
	保田 敦		小林 健一		足立 美津江		
	吉田 幸造*		清水 重仁		鈴木 康之		
10期	木津 治男		清水 啓紀		竹内 勝信		

*一夫婦会員の方

事務局より

会報・冬号には、一律に一言通信はがきを同封してあります。各欄に記入のうえ即投函されて下さい。特に、勤務先電話番号（内線も）をお忘れなくお願いします。現在の名簿では、郵便連絡と夜間連絡には足りませんが、緊急連絡には間に合いません。連絡網を今後設定していく予定もありますので、お願いします。

一言通信…この欄で、ちょっとした同窓会がわりになります。近況をお知らせ下さい。来秋「月見の宴」を予定していますので、小屋の思い出や、企画への要望などをお願いします。（一言通信で足りない方は、別原稿にされて下さい。）

「月見の宴」の出欠…企画を練るために、さしあたりの希望概数をつかみたく、ご記入下さい。次回'95夏号に案内を同封し、正式の出欠をとらせていただきます。

☆OB会費払込について

当該年度の払込票は、夏号に同封することとし、今回は同封されておりません。お忘れの方は、できるだけ速やかに払込をお願いします。払込票を紛失された方は、郵便局で用紙を請求されて、下記口座番号を記入の上、払込されて下さい。

00780-3-14120

金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会

（1年分は二千円です。できるだけ5年分一括でご協力下さい。）

編集後記

昨夏、OB総会が盛会で終了した時、ホッとすると同時に、また未踏の山が見えたように思ったものでした。本当にやっていけるのだろうか？

今回の冬号で、ようやくレールが轢け、その上を「OB号」が走り始めたような印象が持てました。もちろんそのエネルギーは、皆さんからの会費の払込、うれしいお便りの数々です。会報発行の7月、11月は、盆（夏休み）と暮れ（正月）前に、編集・印刷・発送などを終わらせ、できるだけスタッフに負担のかからない時期…と、設定しました。しかも、会報が皆さんのお手元に届くのは、ボーナスで懐の温かい頃と…（やっぱりワンゲルOBって、パワーがあって、しかも頭がいいんですよ…）。

尚、会報中の植物画は、県自然保護課発行のナチュラリスト手帳から転用（19期 大野政信氏もイラスト担当）しました。また、OB名簿には、在部中の死亡者名を追加することにしました。

現役達は、12月23日より3泊4日で荒島岳へ冬合宿にでかけるとのことです。山にはスキーができる程に雪が降り、下界の方は程々に…と勝手なことを願いつつ、どうぞ皆様、よいお年をお迎え下さい。

（事務局長 舟田 節子）

OB会報「やまざと」・94冬号

発行日 平成6年11月

発行者 大島 良治

金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会

編集責任者 舟田 節子

事務局 金沢市橋場町10-49

印刷 中川 晃成

☎0762-22-9288